

茨城県教育財団文化財調査報告第391集

面野井古墳群

都市計画道路新都市中央通り線バイパス
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県土浦土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第391集

おも の い
面野井古墳群

都市計画道路新都市中央通り線バイパス
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県土浦土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



遺跡全景（北上空から）



第2号方形周溝墓出土土器

序

茨城県では、つくば市を世界的な科学技術研究の中核都市と位置づけ、さらには、国際交流の拠点にふさわしい都市として整備を進めています。

その一環として、つくばエクスプレス沿線の各開発地区を結ぶ、都市計画道路新都市中央通り線バイパス建設事業が計画されました。

しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である面野井古墳群が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県土浦土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成24年7月から9月までの3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、面野井古墳群の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化的向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県土浦土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人茨城県教育財团

理事長 鈴木欣一

例　　言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、公益財團法人茨城県教育財團が平成 24 年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市面野井 789 の 6 番地ほかに所在する面野井古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成 24 年 7 月 1 日～9 月 30 日
整理 平成 25 年 12 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長樋村宣行のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長　　稲田義弘
首席調査員　　小林和彦
調査員　　前島直人
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員兼班長小林和彦が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、墳墓周溝内出土の土器類については、神奈川県立旭高等学校教頭西川修一氏に、第 2 号方形周溝墓埋葬施設出土の玉類については、独立行政法人産業技術総合研究所地質標本館副館長下川浩一氏、京都大学大学院文学研究科研究員大賀克彦氏、藤沢市教育委員会埋蔵文化財業務員齊藤あや氏に御指導いただいた。鉄製品の保存処理及びガラス玉の成分分析については株式会社吉田生物研究所に委託し、ガラス玉の成分分析結果は付章として掲載した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = + 9,200 m, Y = + 20,640 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 PG - ピット群 SD - 溝跡 SK - 土坑 TM - 古墳

遺物 G - ガラス製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土  炉(火床面)  粘土範囲

● 土器 ■ ガラス製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 - - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm, cm, gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 「主軸」は、遺構の長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 P 1 ~ P 7 · P 9 → PG 1, P 10 ~ P 13 → PG 2, P 8 · P 14 ~ P 18 → PG 3,

P 19 ~ P 23 → PG 4, P 24 ~ P 33 · P 39 ~ P 44 → PG 6, P 34 ~ P 38 → PG 5

欠番 SK15 · 25

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	11
1 古墳時代の遺構と遺物	11
(1) 方形周溝墓	11
(2) 古墳	28
2 その他の遺構と遺物	34
(1) 炉跡	34
(2) 土坑	38
(3) 溝跡	41
(4) ピット群	44
(5) 遺構外出土遺物	49
第4節 まとめ	55
付 章	61
写真図版	PL 1 ~ PL12
抄 錄	

おも の い 面野井古墳群の概要

遺跡の位置と調査の目的

面野井古墳群は、つくば市の西部、谷田川左岸の標高約20mの台地上から低地にかけて立地しています。

当遺跡の調査は、都市計画道路新都市中央通り線バイパス建設事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、平成24年7月から9月までの3か月間、茨城県教育財団が実施しました。



調査の内容

当古墳群は、これまでの確認調査で古墳時代後期（6・7世紀）の前方後円墳や円墳を中心とする古墳群であると考えられていました。今回はその北部を調査し、古墳時代前期（4世紀）の方形周溝墓や円墳が存在することがわかりました。ここでは、これらの墳墓の周溝から出土した土器類や埋葬施設から出土した玉類を中心に紹介します。



調査区全景（北東上空から）



方形周溝墓の確認状況



方形周溝墓に残された埋葬施設



周溝から出土した装飾壺



埋葬施設から出土した玉類の装着イメージ

調査の成果

今回の調査では、次のようなことがわかりました。第2号方形周溝墓（第11号墳）では、埋葬施設を確認し、棺の上部（頭部側）と下部（脚部側）を固定していたと考えられる粘土塊が出土しました。本県では方形周溝墓の埋葬施設が確認される事例は稀なことです。埋葬施設の内部からは、水晶製の勾玉、緑色凝灰岩や赤色チャート製の管玉、ガラス小玉などの装身具が出土しました。これらは、被葬者の頸部・両手首・両足首にあたる位置からまとめて出土しています。特に頸部には装饰性の高い玉類が飾られていたことがわかりました。また、周溝からは、埋葬時のマツリに用いられたと思われる、赤く塗られた装飾壺などが出土しました。この壺は、縄文や棒状浮文・円形浮文などが施されていることから、弥生時代終末期の特徴を残していることがわかります。

被葬者はこの地域を治めた有力者とみられ、小高い丘に手厚く葬られていました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成21年10月6日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、都市計画道路新都市中央通り線バイパス建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成22年6月30日に現地踏査を、平成22年9月29日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成22年12月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、事業地内に面野井古墳群が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成23年3月1日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成23年3月11日、茨城県土浦土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年3月14日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、都市計画道路新都市中央通り線バイパス建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年3月18日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、面野井古墳群について発掘調査の範囲及び面積について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團（現公益財團法人茨城県教育財團）を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、平成24年7月1日から9月30日まで、発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

面野井古墳群の調査は、平成24年7月1日から9月30日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注写整理			
撤取			

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

面野井古墳群は、茨城県つくば市面野井 789 の 6 番地ほかに所在している。

つくば市は、筑波山を北端として、その南東側に広がる標高 20 ~ 25 m の平坦な筑波・稲敷台地上に位置している。この台地は、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川によって区切られており、東から花室川、蓮沼川、小野川、谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れている。台地の地質は、海成砂層の成田層を基盤として、その上に砂層・砂礫層の竜ヶ崎層、さらに泥質粘土層の常総粘土層、関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている。¹⁾

当遺跡が所在するつくば市南西部は、谷田川、蓮沼川及び西谷田川によって解析された南北に狭長な台地の中央部に位置している。上流域では比較的平坦な台地が残っている一方で、下流域では支谷が樹枝状に入り組んでいる様子が看取できる。

当遺跡は、蓮沼川との合流点から谷田川左岸を約 2 km ほど北に遡った、谷田川を望む標高約 20 m の舌状台地縁辺部に位置している。この台地上には、谷田川及び蓮沼川から大小の支谷が入り込み、起伏に富んだ地形を形成している。

今回報告する調査区域は、面野井古墳群の北端に位置し、標高約 20 m の台地上から西は谷田川左岸の低地、北は谷田川から入り込んだ谷津に下る台地縁辺部に立地している。調査前の現況は畑地及び山林である。

第2節 歴史的環境

面野井古墳群周辺の谷田川や西谷田川、蓮沼川流域の台地上には、旧石器時代から中世にかけて数多くの遺跡が存在している。特に、当遺跡が所在する島名地区及び当遺跡の東側に隣接する葛城地区は調査事例が多い。ここでは、当遺跡と周辺の遺跡の状況について時代を追って概略を述べる。

旧石器時代は、蓮沼川左岸の平北田遺跡²⁾（14）、刈間神田遺跡³⁾、谷田川右岸の島名熊の山遺跡（39）、島名前野東遺跡⁴⁾（21）、島名一丁田遺跡⁵⁾（19）、島名境松遺跡⁶⁾（18）でナイフ形石器や尖頭器などが出土している。また、当遺跡の東側に隣接する面野井北ノ前遺跡⁷⁾（2）では荒屋型陶器、西谷田川左岸の元宮本前山遺跡⁸⁾、下河原崎谷中台遺跡⁹⁾（35）では石器集中地点が確認されており、当地域における石器製作と狩猟生活の様子をうかがい知ることができる。

繩文時代は、元宮本前山遺跡で早期の炉穴、下河原崎谷中台遺跡で早期の炉穴や中期から晩期にかけての堅穴建物跡、島名フバタ遺跡¹⁰⁾（27）で早期と中期の住居跡やフラスコ状土坑、島名境松遺跡で中・後期の堅穴建物跡などがそれぞれ確認されている。これらの遺跡は、河川沿いの低地に向かう台地縁辺部に立地し、早期と中期に集落が形成されるのが特徴といえる。当遺跡においても、遺構は確認できなかったが、早期の尖底土器の底部や石錐が出土しており、当時代の人々の生活の痕跡を見ることができる。

弥生時代は、確認されている遺跡が少ない。島名熊の山遺跡では、出土した後期の土器片に朽痕が認められ、稻作を行っていたと考えられる。

古墳時代に入ると、遺跡数は増加の傾向を見せる。蓮沼川流域では、上流から刈間六十目遺跡¹¹⁾、刈間神

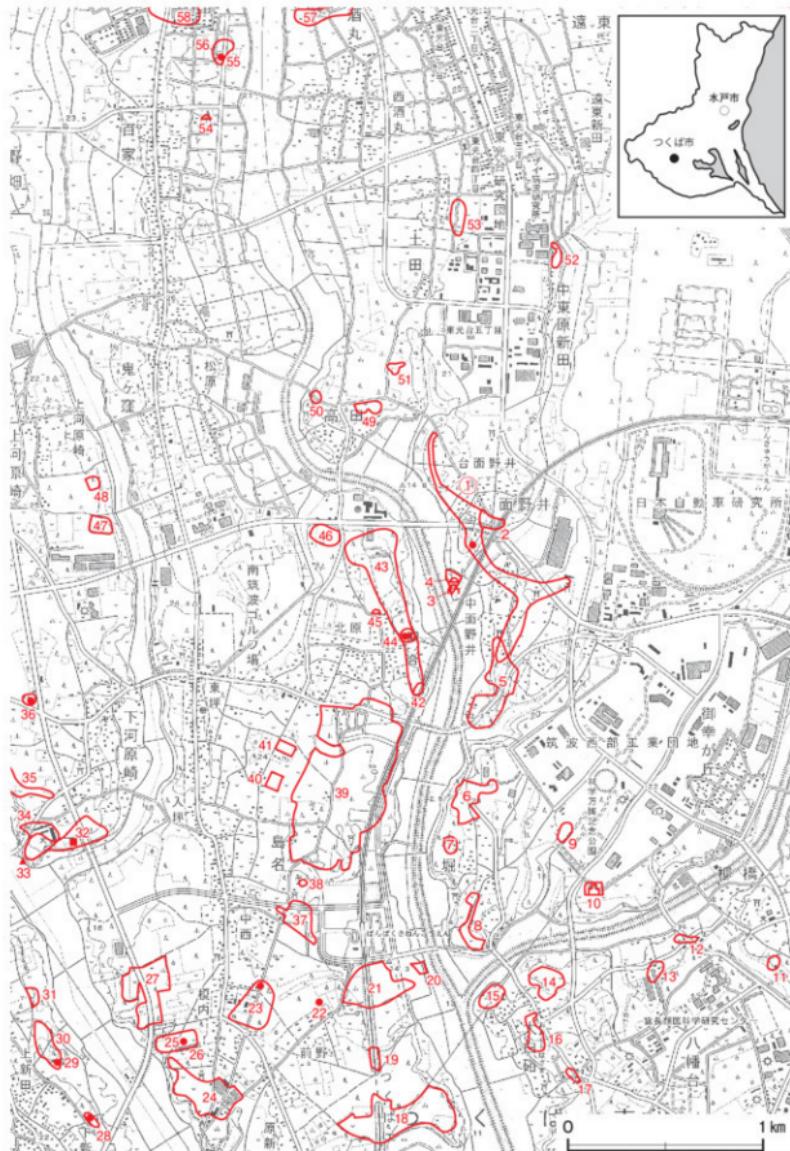
田遺跡、^{せき}柳橋遺跡、平北田遺跡、水堀遺跡と集落が点在する。このうち、苅間六十日遺跡では、前・中期の堅穴建物跡12棟が確認され、前期の堅穴建物跡からは、弥生時代後期の十王台式土器とともに棒状浮文・円形浮文・結節繩文等が施された南関東系の装飾壺が出土している。谷田川流域では、島名一丁田遺跡、^境境松貝塚¹²⁾で前期の小規模な集落跡が確認され、堅穴建物跡から南関東系の装飾壺が出土している。島名熊の山遺跡、島名前野遺跡^{13) (20)}、島名前野東遺跡でも小規模な集落跡が確認されている。西谷田川流域では、元宮本前山遺跡、下河原崎谷中台遺跡、島名ツバタ遺跡等で中期の集落跡が確認され、特に下河原崎谷中台遺跡では、県内初の琴柱形石製品が出土しており、注目されている。後期になると、台地の内陸部にまで集落が形成されるようになり、島名熊の山遺跡をはじめとし、島名八幡前遺跡^{14) (37)}、島名前野遺跡、島名前野東遺跡、平北田遺跡などの集落が古墳時代の終わりまで継続して営まれていた。前期の墳墓は、西谷田川左岸の旧谷田部町南部に位置する境松貝塚で方形周溝墓1基、蓮沼川左岸の当遺跡から東へ3kmほどに位置する苅間六十日遺跡で方形周溝墓及び円形周溝墓各1基、当遺跡でも方形周溝墓4基及び円墳1基を確認した。谷田川右岸の島名前野東遺跡では、集落に付随した形で方形周溝墓3基が確認された。このように、河川沿いの台地縁辺部に弥生時代の墓制の名残と考えられる方形周溝墓が散見される。後期の古墳は当遺跡のほか、島名熊の山遺跡、島名前野古墳、島名櫻内古墳群⁽²³⁾、島名闇ノ台古墳群⁽⁴³⁾、下河原崎高山古墳群^{15) (32)}などがあり、いずれも径10～20mの小円墳が中心で、地域的な群集墳のあり方を示している。

奈良・平安時代は、律令制の確立により、島名を含む谷田部地区は河内郡に編入される。河内郡衙は、当遺跡から北東へ4.5kmほどに位置する桜地区の金田西道跡・金田西坪A遺跡・金田西坪B遺跡¹⁶⁾付近に所在する。『和名類聚抄』にみえる河内郡八部郷は、現在の谷田部地区に比定され、地名の語源になっている。また、島名は『和名類聚抄』にみえる「嶋名郷」に比定されており、島名熊の山遺跡はその拠点的な集落であったと考えられる。奈良・平安時代の遺跡は、蓮沼川流域では、下平塚蕪木台遺跡¹⁷⁾、苅間六十日遺跡、苅間神田遺跡が確認されている。特に、下平塚蕪木台遺跡は、蓮沼川流域の開墾にあたった集落とされ、鉄製農具等を生産していたと考えられる鍛冶工房跡が調査されている。東谷田川流域では、島名熊の山遺跡をはじめ、島名八幡前遺跡、島名前野遺跡、島名前野東遺跡などが挙げられる。平安時代末には苅間、谷田部、小野崎などに在地領主層が出現したと伝えられている。

中世は、谷田部地区の大部分は田中莊と呼ばれ、鎌倉幕府の成立後、田中莊は小田氏の支配下に入る。室町時代には、小田氏の配下の平井手氏が島名・面野井に居住していたと伝えられている。これまでに確認された中世以降の遺跡は城館跡がほとんどであり、当遺跡西部に隣接する谷田川を望む台地縁辺部には平井手氏の居城と伝えられる面野井城跡(3)があり、島名前野東遺跡からは、方形に巡る堀を伴う居館跡が確認されている。島名熊の山遺跡の南西部は、中世においては広大な墓域となっており、墓坑に伴って地下式坑や方形堅穴遺構が多数検出されている。これらは、13世紀に開山された妙徳寺との関連がうかがえる。

註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3　関東地方』共立出版　1986年10月
- 2) 舟橋理『平北田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書』『茨城県教育財團文化財調査報告』第336集　2011年3月
- 3) 成爲一也(仮称)『葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　神田遺跡』『茨城県教育財團文化財調査報告』第121集　1997年3月
- 4) a 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司『島名前野東遺跡・島名境松遺跡・谷田部塗遺跡　島名・福田坪一型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』『茨城県教育財團文化財調査報告』第191集　2002年3月



第1図 面野井古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「上郷」「谷田部」）

表1 面野井古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	面野井古墳群			○					30	真瀬堀附南遺跡	○	○				
2	面野井北ノ前遺跡	○		○	○	○	○	○	31	真瀬堀附北遺跡			○			
3	面野井城跡					○			32	下河原崎高古墳群			○			
4	面野井西ノ台塚					○	○		33	下河原崎高山窯跡			○			
5	面野井南遺跡			○	○	○	○	○	34	下河原崎高山遺跡		○				
6	水堀下道遺跡			○	○				35	下河原崎谷中台遺跡	○	○	○	○		
7	水堀屋敷添遺跡	○	○				○		36	下河原崎古墳群			○			
8	水堀道後前遺跡				○				37	島名八幡前遺跡			○	○	○	
9	水堀遺跡			○					38	島名葉師遺跡			○			
10	大和田氏屋敷跡					○	○		39	島名熊の山遺跡	○	○	○	○	○	○
11	柳橋谷津遺跡			○					40	島名本田遺跡			○	○	○	○
12	柳橋仲畑遺跡			○					41	島名中台遺跡			○	○		
13	柳橋遺跡			○			○		42	島名閔ノ台南B遺跡	○	○		○	○	
14	平北田遺跡	○	○	○	○	○	○	○	43	島名閔ノ台古墳群			○			
15	平後遺跡			○		○	○		44	島名閔ノ台南遺跡			○	○		
16	大白砦西ノ裏遺跡			○					45	島名閔ノ台塚				○	○	
17	大白砦桜下遺跡			○					46	島名閔の台遺跡			○			
18	島名境松遺跡	○	○	○					47	元中北東藤四郎遺跡			○			
19	島名一丁田遺跡	○	○	○		○	○		48	上河原崎前山遺跡			○			
20	島名前野遺跡	○		○	○	○	○		49	高田遺跡			○	○		
21	島名前野東遺跡	○	○	○	○	○	○		50	高田和田台遺跡			○			
22	島名前野古墳				○				51	高田原山遺跡			○			
23	島名榎内古墳群				○				52	中東原新田遺跡			○			
24	島名榎内南遺跡				○	○			53	土田遺跡			○	○	○	○
25	島名榎内西古墳				○				54	百家愛宕塚				○	○	
26	島名榎内遺跡				○				55	百家根崎古墳			○			
27	島名ツバタ遺跡	○		○		○	○		56	百家根崎遺跡			○	○		
28	真瀬新田古墳群				○				57	酒丸西谷ヶ代遺跡				○	○	
29	真瀬中道古墳				○				58	高野古墳群					○	

- b 犬泉達司「鳥名前野東遺跡・鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」「茨城県教育財団文化財調査報告」第215集 2004年3月
- c 小松崎和治「鳥名境松道跡・鳥名前野東遺跡・鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X」「茨城県教育財団文化財調査報告」第281集 2007年3月
- 5) 鹿島直樹「鳥名一町田道跡・鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業及び常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財団文化財調査報告」第230集 2004年3月
- 6) 訂5)に同じ
- 7) 鹿島直樹「鳥名関ノ台南B道跡・面野井北ノ前道跡・常磐新線工事地内埋蔵文化財調査報告書2」「茨城県教育財団文化財調査報告」第231集 2004年3月
- 8) 高野裕厘「元宮本前山道跡・上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」「茨城県教育財団文化財調査報告」第265集 2006年3月
- 9) a 高野裕厘「下河原崎谷中台道跡・鳥名ヲバタ道跡・上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」「茨城県教育財団文化財調査報告」第282集 2007年3月
b 斎藤真弥「下河原崎谷中台道跡・下河原崎高山古墳群・上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」「茨城県教育財団文化財調査報告」第292集 2008年3月
- 10) 訂9)に同じ
- 11) 小澤重雄「葛城一体型土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III 六十日道跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第160集 2000年3月
- 12) 久野俊度「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 境松道跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第41集 1987年3月
- 13) 桶田義弘「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI 鳥名前野道跡」「茨城県教育財団文化財調査報告」第175集 2001年3月
- 14) 吹野富美夫・青木仁昌「鳥名八幡前道跡・鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書V」「茨城県教育財団文化財調査報告」第201集 2002年3月
- 15) 訂9) aに同じ
- 16) 白田正子「金田西道跡・金田西坪B道跡・九重東同庵寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII」「茨城県教育財団文化財調査報告」第209集 2003年3月
- 17) a 川井正一・白田正子・飯田浩彦・本橋弘巳・斎藤和浩・江原美奈子「下平塚蕪木台道跡 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VI」「茨城県教育財団文化財調査報告」第326集 2009年3月
b 斎藤貴史・小林和彦「下平塚蕪木台道跡2 葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書VII」「茨城県教育財団文化財調査報告」第363集 2012年3月



第2図 面野井古墳群調査区設定図（つくば市都市計画図2,500分の1から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

面野井古墳群は、つくば市の西部に位置し、谷田川左岸の標高約20mの台地縁辺部に立地している。調査面積は3,020m²で、調査前の現況は畑地及び山林である。

調査の結果、古墳時代の方形周溝墓4基、円墳1基及び時期不明の炉跡6基、土坑25基、溝跡3条、ピット群6か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に13箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、土師器(壺・堆・器台・高壺・壺・裝飾壺・二重口縁壺・底部穿孔壺)、石器(剥片・鐵・磨石)、石製品(勾玉・管玉)、金属製品(刀子・不明)、ガラス製品(玉・小玉)などである。

第2節 基本層序

調査区南西部の調査区端部で、台地上の平坦面(E2e1区)にテストピットを設定し、基本土層(第3図)の観察を行った。

土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから6層に細分でき、観察結果は以下の通りである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土層である。ロームブロックを少量含み、粘性・締まりとともに弱く、層厚は20~25cmである。

第2層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとともに普通で、層厚は40~50cmで、第2黒色帯(BBⅡ)と考えられる。ソフトローム層が見られないのは、耕作によって削平(整地)されたためと考えられる。

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。炭化粒子を微量、粘土粒子を中量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は20~30cmである。

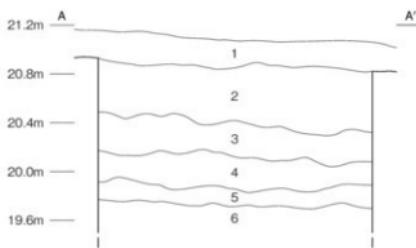
第4層は、にぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘土粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は15~30cmである。

第5層は、にぶい黄褐色を呈するハードローム層から常総粘土層への漸移層である。粘土ブロックを中量、炭化粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は10~15cmである。

第6層は、にぶい黄褐色を呈する常総粘土層である。粘性・締まりとともに強い。下部は未掘のため、層厚は不明である。

なお、方形周溝墓や円墳などの遺構は、第2層の上面で確認した。

第3図 基本土層図



第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、方形周溝墓4基、古墳1基（円墳）を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。なお、方形周溝墓については、つくば市で定めた遺構番号との整合性を考慮し、（ ）内につくば市の通し番号を記した。

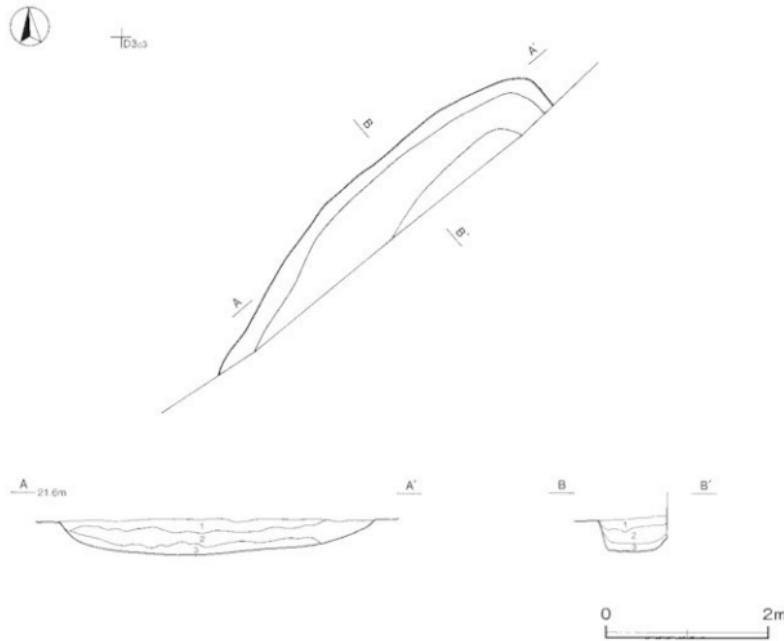
(1) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第10号墳）（第4図）

位置 調査区東部のD 3c3 区、標高 21 mほどの台地縁辺部に位置している。

確認状況 大半が調査区域外に延びているため、周溝の北西辺の一部のみを確認した。南東部では、平成23年度のつくば市教育委員会による調査で、全形が確認されている。

規模と形状 確認したのは周溝の北西辺の一部である。つくば市教育委員会による調査と併せた規模は、内法が北東・南西軸 7.68 m、北西・南東軸 6.62 m、外法が北東・南西軸 9.47 m、北西・南東軸 8.82 mである。長軸方向は N - 50° - E で、平面形は隅丸長方形である。



第4図 第1号方形周溝墓実測図

周溝 確認できた上幅は 0.75 m、下幅は 0.35 ~ 0.70 mで、深さは 44cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外側は外傾して立ち上がっている。台状部側は確認できなかった。

覆土 3 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

周溝土層解説

- | | |
|------------------------|---------------|
| 1 黒 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 岩 色 ローム粒子中量 |
| 2 墓 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 | |

所見 時期は、周囲に近接して所在する方形周溝墓と主軸がほぼ揃っていることや、つくば市教育委員会の調査で古墳時代前期の埴・高坏が出土していることから、古墳時代前期と考えられる。

第2号方形周溝墓（第11号墳）（第5～12回）

位置 調査区東部の C 3h2 ~ D 3b6 区、標高 21 m ほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第27号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 内法が北東・南西軸 11.87 m、北西・南東軸 10.22 m、外法が北東・南西軸 16.58 m、北西・南東軸 16.11 mである。長軸方向は N - 35° - E で、平面形は隅丸方形である。台状部は耕作によって削平されしており、中央部で埋葬施設 1 基を確認した。墳丘の盛土の状況は不明である。

周溝 上幅 1.79 ~ 3.52 m、下幅 0.84 ~ 1.92 m、深さは 39 ~ 63cmで、断面は逆台形である。南東辺が上幅 3.10 ~ 3.52 m、下幅 1.10 ~ 1.92 mで最も広く、北東辺が上幅 1.79 ~ 2.05 m、下幅 0.84 ~ 1.03 mで最も狭くなっている。溝底は南コーナー部から南西辺にかけてが 39cm と最も浅くなっている。底面はやや凹凸があり、壁は台状部側が外傾し、外側が緩やかに立ち上がっている。

覆土 8 層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

周溝土層解説

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 楠 帽 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 墓 褐 色 ローム粒子少量 |
| 2 墓 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 6 墓 褐 色 ローム粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 墓 褐 色 ローム粒子中量 |
| 4 墓 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 墓 褐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |

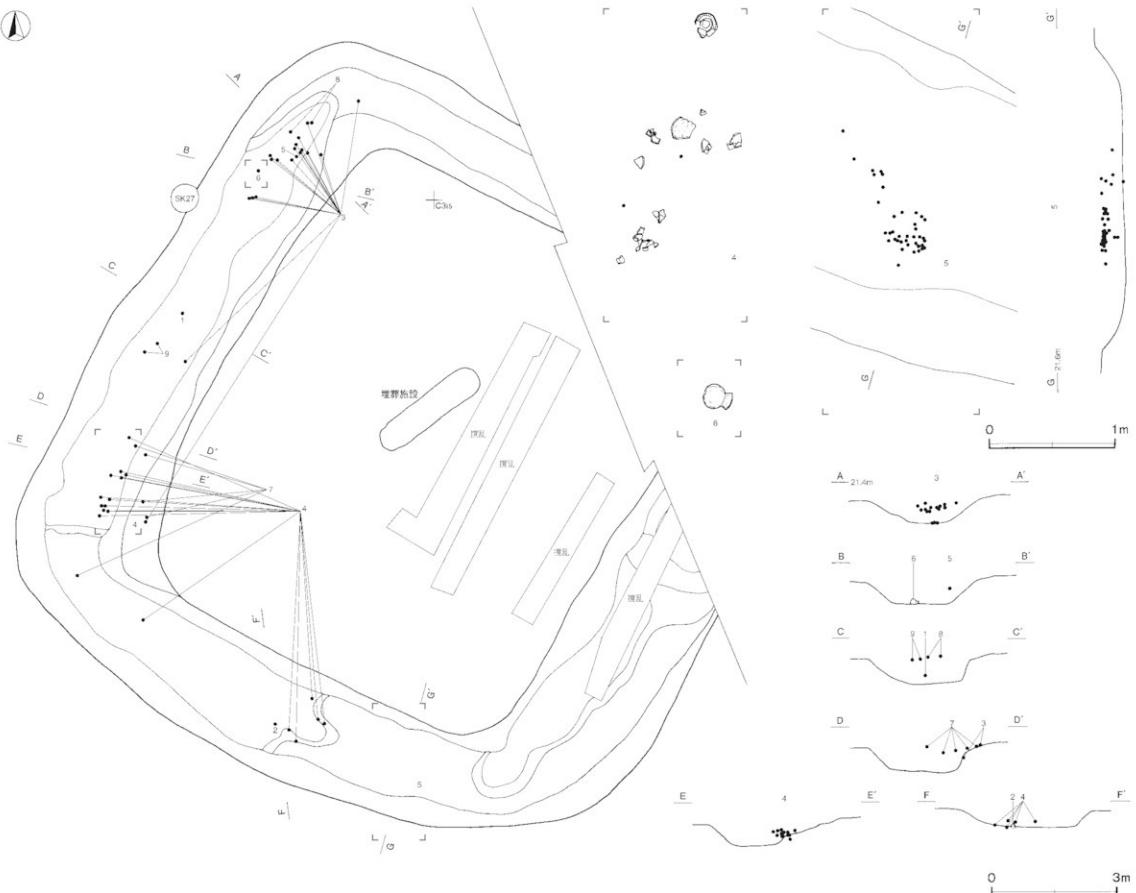
埋葬施設 台状部のほぼ中央部に位置する木棺直葬である。上部は耕作によって削平されている。掘方は長軸 2.83 m、短軸 0.67 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 53° - E である。深さは 13 ~ 24cm で、断面形は浅い U 字形である。掘方の北東端部（頭部側）及び南西端部（脚部側）に、粘土塊を確認した。粘土塊は、位置と形状から棺の木口を押さえていたと考えられ、一辺約 50cm の不整形で、厚さが約 15cm である。第1～3層は盛土の崩落土層、第4・5層は棺を固定するための層である。長軸の土層断面から、脚部側を押さえていた粘土塊（第5層）と、盛土の崩落土層（第3層）の境界が南西側に向かって緩やかに上っていることから、脚部側が舟形を呈していたと考えられる。掘方の底面は、全体がわずかに硬化しており、特に中央部からやや南西寄りの位置が顕著であった。

埋葬施設土層解説

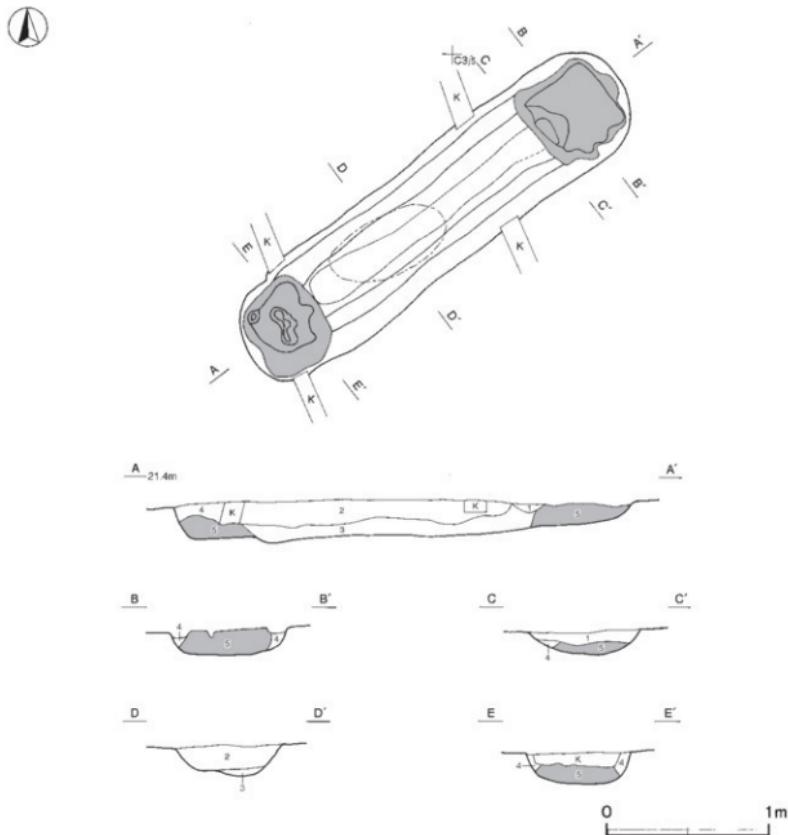
- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 墓 色 ローム粒子中量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量 | 4 墓 色 ロームブロック中量 |
| 2 墓 褐 色 ロームブロック少量 | 5 墓 色 粘土ブロック中量、ローム粒子・鉄分少量 |
| 3 墓 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 周溝からは、土師器片 596 点（环 11、堆 8、壺 577）が、周溝北西辺及び南西辺の台状部側の底面から覆土中層にかけて出土している。そのほか、繩文土器片 34 点（深鉢）、剥片 5 点も出土している。2 は南西辺中央部の底面から完形で、5 は南西辺南寄りの底面から覆土下層にかけて土压で押しつぶされた状態でそれぞれ出土している。1 は北西辺中央部、6 は北西辺北寄りの覆土下層からほぼ完形で出土している。3

第5図 第2号方形周溝墓実測図(1)



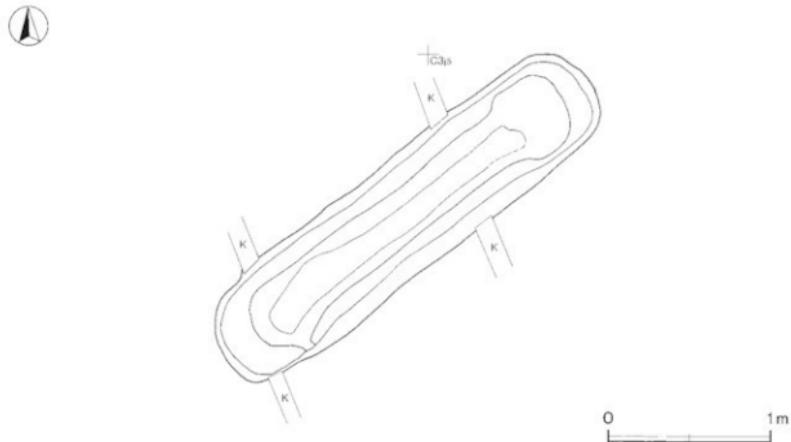
第6図 第2号方形周溝墓実測図(2)



第7図 第2号方形周溝墓埋葬施設実測図(1)

は北西辺北寄りを中心に、台状部側の壁面から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。7は西コーナー部付近、4は西コーナー部から南西辺にかけての、台状部側の壁面から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。9は北西辺中央部、8は北コーナー部付近の覆土中層から出土した破片2点がそれぞれ接合したものである。1・2・5・6は周溝の底面から覆土下層にかけて出土していることから、台状部の縁辺に置かれていたものが、周溝に土砂が堆積する過程でそれぞれ転落したと考えられる。3・4・7～9は周溝の覆土中層や台状部側の壁面から覆土中層にかけて出土していることから、周溝が埋まりかけてからそれぞれ転落したと考えられる。

埋葬施設からは、石製品34点(勾玉1、管玉33)、鉄製品2点(刀子、不明)、ガラス製品6点(玉1、小玉5)が、北東部、中央部、南西部の3か所の掘方底面から覆土下層にかけてまとめて出土している。Q1～Q6・Q8・



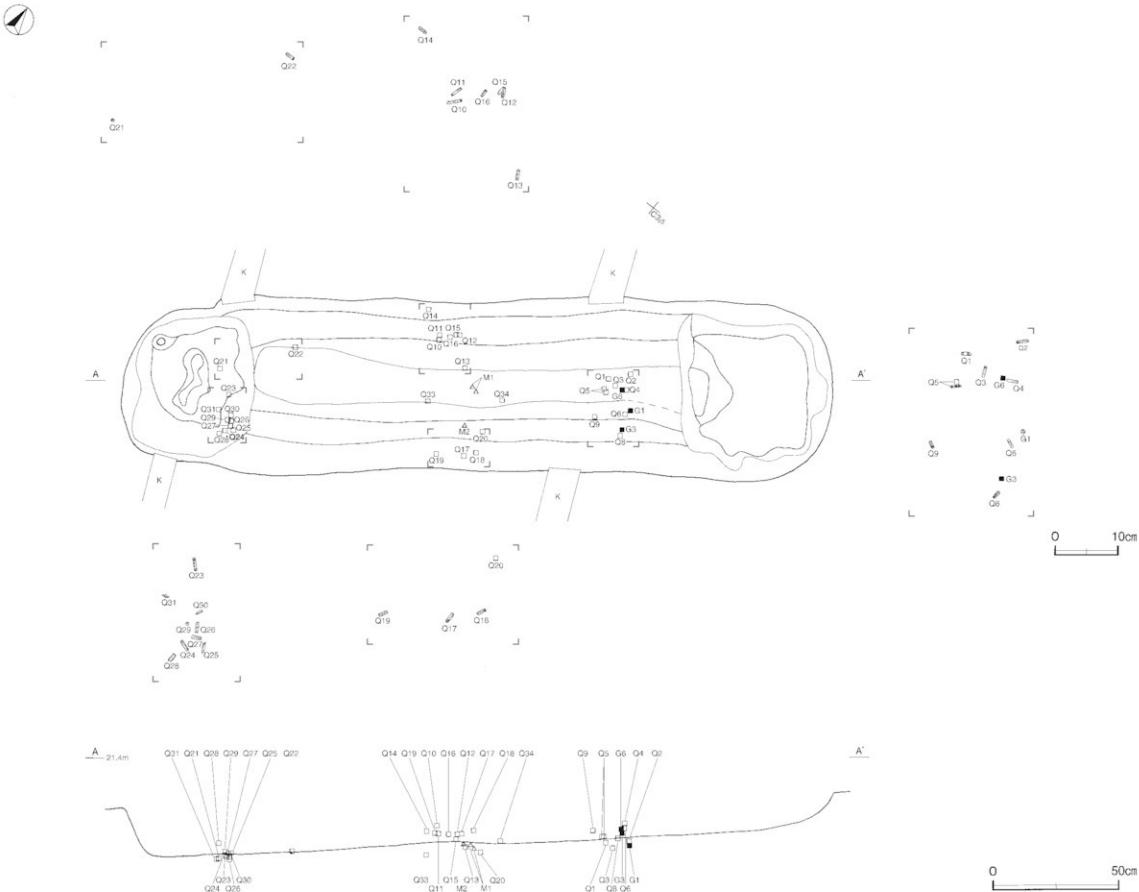
第8図 第2号方形周溝墓埋葬施設実測図(2)

Q 9・G 1・G 3・G 6は、北東部の掘方底面から覆土下層にかけてそれぞれ出土している。これらの出土位置は、被葬者の頭部の位置に相当する。Q 10～Q 20・Q 33・Q 34・M 1・M 2は中央部の掘方底面から覆土下層にかけてそれぞれ出土している。その中で、Q 10～Q 16の出土位置は、北寄りであることから右手首の位置に相当する。Q 17～Q 20の出土位置は、南寄りであることから、左手首の位置に相当する。Q 21～Q 31は南西部の掘方底面から覆土下層にかけてそれぞれ出土している。その中で、Q 21・Q 22の出土位置は、北寄りであることから右足首の位置に相当する。Q 23～Q 31の出土位置は、南寄りであることから、左足首の位置に相当する。Q 7・G 2・G 4・G 5は北東部（頭部に相当する位置）、Q 32は南西部南寄り（左足首に相当する位置）の覆土中からそれぞれ出土している。

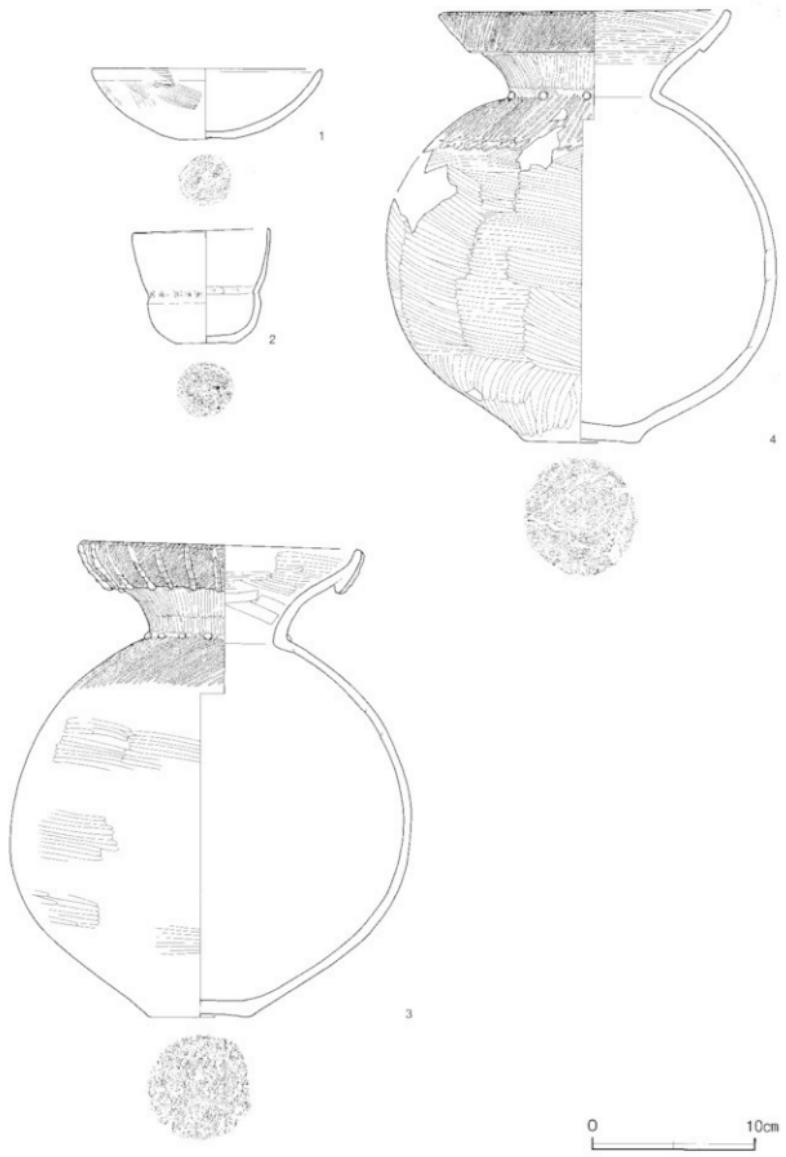
所見 時期は、出土土器から4世紀前葉に比定できる。土器が周溝の北西辺及び南西辺から集中して出土しており、埋葬時の祭祀行為が行われたと考えられる。また、南コーナー部から南西辺にかけて約4mの幅で、底が浅くなっていることから、埋葬施設に通じるブリッジであった可能性がある。埋葬施設の掘方の規模や棺の押さえに使用されていた粘土塊の位置及び玉類の出土位置から、被葬者は160cm前後の身長と推定できる。特に、頭部に相当する位置には、水晶製の勾玉、赤色チャート製の管玉、ガラス玉等の希少性・装飾性の高い玉類が飾られていた。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表（第10～12図）

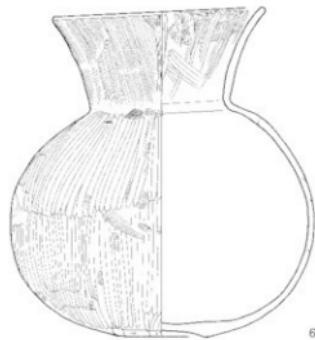
番号	種別	器種	口径	筒高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器部	坪	14.2	4.4	3.3	黄石・石英・黑母	明黄褐	普通 口縁部外・内面椎子ナギ 体部外面鉄粒位のハケ目 調整後ナギ 内面椎子ナギ	周溝底土下層 95% PL 8		
2	土器部	坪	8.1	7.1	3.6	黄石・石英・ 青白・黑色粒子	明黄褐	普通 口縁部外・内面椎子ナギ 体部外面ハケ目調整後 ナギ	周溝底面 100% PL 8		
3	土器部	壺	17.0	29.4	6.3	黄石・石英・ 青白・黑色粒子	浅黄褐	口縁部外側・底部周縁部文様後 横状浮出30 筋 椎子ナギ 体部外側・口縁部内面斜射 筋 椎子ナギ	台状部底面 70% PL 8		
4	土器部	壺	17.4	26.8	7.3	黄石・石英・ 青白・黑色粒子	赤褐	普通 口縁部外側・底部周縁部文様 体部外側・口縁部内面斜射 筋 椎子ナギ	台状部底面 70% PL 8		
5	土器部	壺	27.8	(24.4)	-	黄石・石英・ 青白・黑色粒子	暗赤	普通 口縁部外側ハケ目調整後 鉄粒位のハケ目調整 体部外側・口縁部内面斜射 筋 椎子ナギ	周溝底面 30% PL 9		
6	土器部	壺	12.9	20.5	5.6	黄石・石英・ 青白・細繩	灰白	普通 口縁部外側位のハケ目調整 体部外側・口縁部内面斜射 筋 椎子ナギ	周溝底土下層 99% PL 8		



第9図 第2号方形周溝墓埋葬施設実測図(3)



第10図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図(1)



6



7



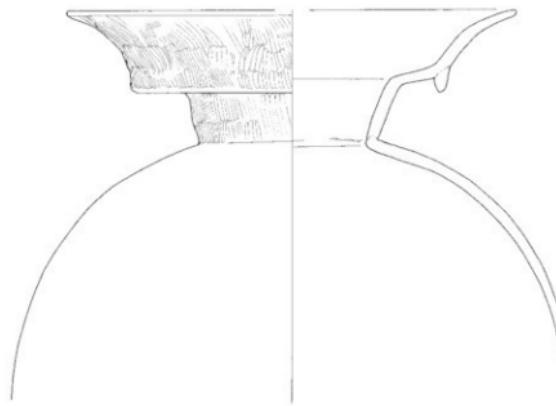
8



9

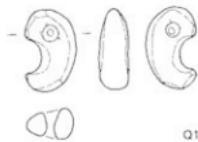


10

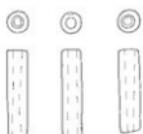


5

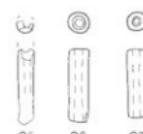
0 10cm



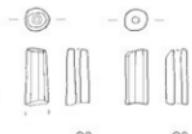
Q1



Q2 Q3 Q4



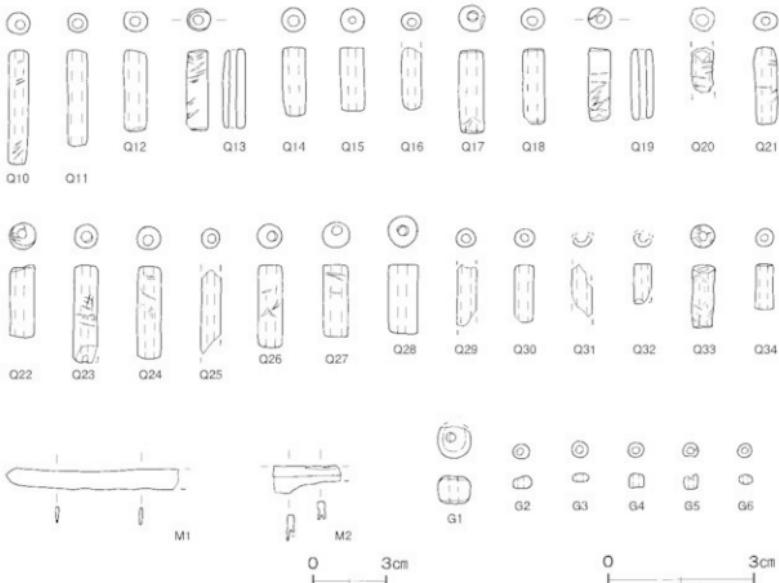
Q5 Q6 Q7



Q8 Q9

0 3cm

第 11 図 第 2 号方形周溝墓出土遺物実測図 (2)



第12図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図(3)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	土師器	壺	-	(3.8)	-	長石・石英・赤色粘土	にむく質地	普通	頭部外縫斜位のハケ目調整 頭部内面ハケ目調整	台状基盤斜面 覆土中層	20% PL.8
8	土師器	壺	-	(2.1)	6.0	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外縫下端横位のヘウ削り 底部焼成前穿孔	周溝覆土中層	10% PL.9
9	土師器	壺	-	(1.7)	5.7	長石・石英・輝緑岩	明赤褐色	普通	体部外縫下端横位のヘウ削り 底部焼成前穿孔	周溝覆土中層	10% PL.9

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	勾玉	165	0.66	0.13 ~ 0.34	143	水晶	全面研磨調整 二方向からの穿孔	周溝施設 覆土底面	PL.12

番号	器種	長さ	幅(幅)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	管玉	201	0.42	0.23 ~ 0.28	0.36	緑色凝灰岩	全面研磨調整 斜面円形 二方向からの穿孔	埋葬施設 覆土底面	PL.12
Q 3	管玉	178	0.42	0.20	(0.37)	緑色凝灰岩	一部欠損 全面研磨調整 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土底面	PL.12
Q 4	管玉	120	0.46	0.14 ~ 0.23	0.52	緑色凝灰岩	全面研磨調整 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 5	管玉	(155)	[0.36]	[0.14]	(0.15)	凝灰岩	欠損 研磨調整 一方から穿孔	埋葬施設 覆土底面	PL.12
Q 6	管玉	151	0.42	0.24 ~ 0.25	(0.27)	緑色凝灰岩	一部欠損 全面研磨調整 斜面円形 二方向からの穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 7	管玉	129	0.39	0.15	0.29	緑色凝灰岩	全面研磨調整 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土中層	PL.12
Q 8	管玉	(116)	0.45 ~ 0.49	0.11 ~ 0.16	(0.42)	赤色チャート	下端部欠損 全面研磨 斜面六角形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土底面	PL.12
Q 9	管玉	(114)	0.47	0.14	(0.43)	赤色チャート	両端部欠損 全面研磨 斜面は六角形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 10	管玉	237	0.47	0.19	0.75	凝灰岩	表面劣化 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 11	管玉	203	0.42	0.22	0.52	凝灰岩	表面劣化 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 12	管玉	169	0.51	0.21	0.62	凝灰岩	表面劣化 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土下層	PL.12
Q 13	管玉	162	0.47	0.20	(0.53)	蛇紋岩	一部欠損 全面研磨調整 斜面円形 一方から穿孔	埋葬施設 覆土底面	PL.12

番号	器種	長さ	幅(幅)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	管玉	1.45	0.51	0.24	0.53	結晶片岩	全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 15	管玉	1.32	0.50	0.15	0.68	凝灰岩	全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 16	管玉	1.32	0.41	0.19	0.38	凝灰岩	表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 17	管玉	1.68	0.52	0.21 ~ 0.23	0.75	蛇紋岩	全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 18	管玉	1.53	0.46	0.18	0.53	結晶片岩	一部欠損 全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 19	管玉	1.48	0.49	0.17	0.52	凝灰岩	一部欠損 表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 20	管玉	(0.96)	(0.50)	(0.24)	(0.19)	凝灰岩	欠損 表面劣化 断面円形	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 21	管玉	1.59	0.49	0.19	0.47	凝灰岩	両端部壘立 表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12
Q 22	管玉	1.49	0.52	0.17	(0.66)	凝灰岩	一部欠損 全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 23	管玉	2.01	0.49	0.22	(0.78)	凝灰岩	一部欠損 表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 24	管玉	1.93	0.49	0.21	0.88	凝灰岩	全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 25	管玉	(1.75)	0.38	(0.17)	(0.43)	凝灰岩	両端部欠損 研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 26	管玉	1.72	0.50	0.23	0.75	凝灰岩	表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 27	管玉	1.48	0.52	0.22	(0.67)	凝灰岩	表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 28	管玉	1.43	0.61	0.21	0.87	緑色凝灰岩	全面研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 29	管玉	(1.27)	0.41	0.21	(0.28)	凝灰岩	両端部欠損 研磨調整 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
M 30	管玉	1.21	0.41	0.18	(0.26)	凝灰岩	一部欠損 表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 31	管玉	(1.12)	(0.29)	(0.21)	(0.23)	(0.18)	凝灰岩 欠損調査 表面劣化	埋葬施設 青土底面	PL11
Q 32	管玉	0.78	(0.28)	0.15	(0.06)	緑色凝灰岩	欠損 研磨調整	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 33	管玉	1.32	0.50	0.15	0.52	凝灰岩	表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土底面	PL12
Q 34	管玉	0.92	0.38	0.16	0.18	凝灰岩	表面劣化 断面円形 一方向からの穿孔	埋葬施設 青土下層	PL12

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(7.1)	0.9	0.07 ~ 0.13	(1.69)	鉄	切先・茎部欠損 鋼化調査 中位彎曲 断面三角形	埋葬施設 青土底面	PL11
M 2	不明	(2.9)	(1.1)	0.3	(1.88)	鉄	両端部欠損 原形不明 鋼化調査 板状素材を折曲加工	埋葬施設 青土底面	PL11

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G 1	玉	0.68	0.60	0.21	(0.32)	カリガラス	一部欠損 表面劣化 青緑色	埋葬施設 青土下層	PL12
G 2	小玉	0.36	0.30	0.14	0.03	カリガラス	縦・紫色	埋葬施設 青土中	PL12
G 3	小玉	0.36	0.18	0.17	0.03	カリガラス	縦・紫色	埋葬施設 青土下層	PL12
G 4	小玉	0.34	0.32	0.18	0.02	カリガラス	青緑色	埋葬施設 青土中	PL12
G 5	小玉	0.31	0.33	0.16	(0.02)	カリガラス	一部欠損 青緑色	埋葬施設 青土中	PL12
G 6	小玉	0.31	0.22	0.11	0.02	カリガラス	表面劣化 青緑色	埋葬施設 青土下層	PL12

第3号方形周溝墓（第12号墳）（第13・14図）

位置 調査区東部のC 3f3～C 3h5区、標高21 mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 大部分が調査区域外に延びているため、西コーナー部の周溝及び台状部のみを確認した。確認できた規模は、内法が北東・南西軸 2.85 m、北西・南東軸 5.33 m、外法が北東・南西軸 4.63 m、北西・南東軸 8.07 mである。北西壁の方向はN - 35° - Eで、平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定できる。台状部は平坦で、埋葬施設は確認できなかった。墳丘の原形や盛土の有無については、耕作によって削平されているため不明である。

周溝 上幅0.81～1.93 m、下幅0.27～1.46 m、深さは15～35cmで、断面は浅いU字形または逆台形である。

周溝幅は、南西辺の南部で狭くなっていて、溝底も深くなっている。底面は、西コーナー部付近でやや凸凹が

ある。壁は外傾して立ち上がっている。

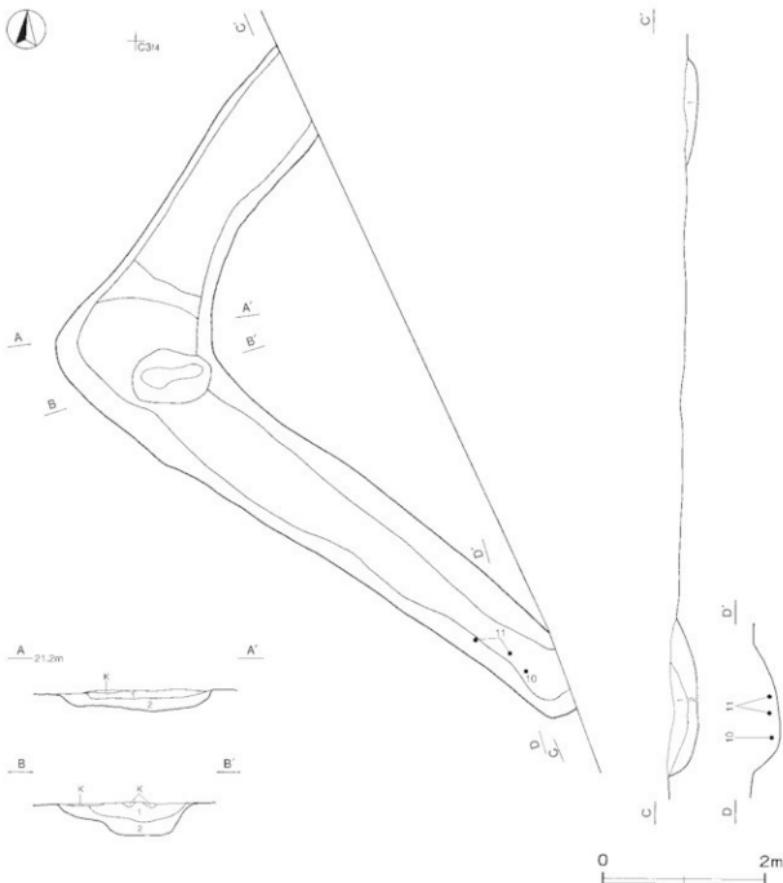
覆土 2層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

周溝土層解説

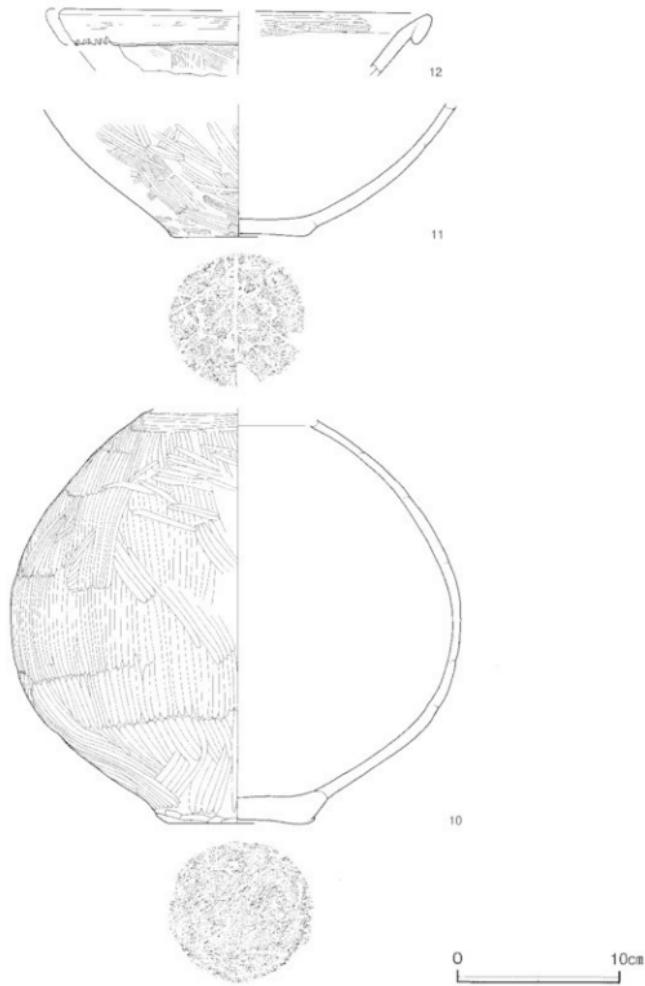
1 周 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 極 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片 27点（蓋）が周溝南部の底面から出土している。そのほか、覆土中から縄文土器片 16点（深鉢）、剥片 2点も出土している。10・11は周溝の南辺西部の底面からそれぞれ出土している。12は覆土中から出土している。いずれも台状部の縁辺に置かれていたものが転落したと考えられる。

所見 時期は、出土土器から4世紀前葉に比定できる。



第13図 第3号方形周溝墓実測図



第14図 第3号方形周溝墓出土遺物実測図

第3号方形周溝墓出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	船土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	壺	-	(25.6)	9.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面施家のへラ磨き 内面横位のへラナダ 底部へラ磨き 外面赤茶	周溝底面	70% PL9
11	土師器	壺	-	(8.2)	8.3	長石・石英・雲母	にふ・黒褐	普通	体部外面ハケ目調整後へラ磨き 底部木葉痕	周溝底面	20%
12	土師器	壺	[23.4]	(39)	-	長石・石英・磁輝	棕	普通	口縁部外面横ナダ 内面へラ磨き 刃刃窓下端 部ナダと目 底部外縁ハケ目調整 赤彩痕	周溝覆土中	10% PL10

第4号方形周溝墓（第14号墳）（第15図）

位置 調査区東部のD3e7～D3f8区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

確認状況 周溝の一部を確認した。溝の延びる方向から、方形周溝墓の周溝の北東辺または南西辺の一部とみられる。

規模と形状 確認できた規模は、長さ3.60m、幅2.32mである。長軸方向は、N-20°-Eと推測できる。

周溝 確認できた上幅は2.32m、下幅は1.50mで、深さは40～56cmである。断面は逆台形を呈している。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。

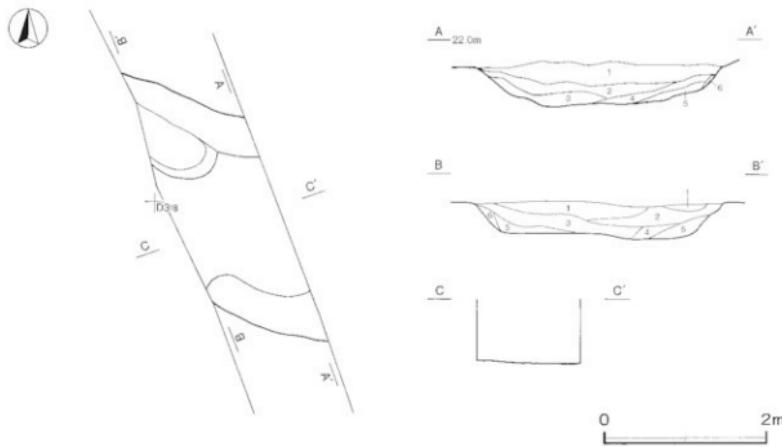
覆土 6層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

周溝土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量	4 褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子微量	6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片2点（巣カ）が周溝の覆土中から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土土器が細片のため明確ではないが、周囲に近接している方形周溝墓と同時期の4世紀前葉と考えられる。



第15図 第4号方形周溝墓実測図

表2 方形周溝墓一覧表

番号	位 置	長軸方向 [北緯35°46'30"]	平面形	規 模		周 溝			埋葬施設	主な出土遺物	備 考
				内法(m)	外法(m)	壁面	底面	溝深(m)			
1	D3e7	N-20°-E	椭丸長方形	7.68×6.62	9.47×8.82	外傾	平坦	44	自然	-	※内法・外法は「くば市教育委員会の測定上使用したもの」
2	C3h2～ D3f6	[N-35°-E] [N-35°-E]	椭丸方形	11.87×10.22	16.58×16.11	外傾 能斜	やや凹凸	39～63	自然	木棺直葬	土師器、石製品 陶製品、ガラス製品 本跡→SK27
3	C3h2～ D3f5	N-35°-E	〔椭丸方形〕 〔椭丸長方形〕	(2.85)×5.33	(4.63)×8.07	外傾	やや凹凸	15～35	自然	-	土師器
4	D3e7～ D3f8	[N-20°-E]	-	(1.58 × -)	(1.43 × -)	外傾	やや凹凸	40～56	自然	-	土師器

(2) 古墳

第13号墳 (第16~19図)

位置 調査区南西部のD 212区~E 2d7、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 南東半部は調査区域外に延びているため、確認できた周溝は半円状をしており、規模は、内径15.00mで、周溝外縁径23.96mである。調査区域外の現況地形から、内径15.54m、周溝外縁径24.36mの円墳と推定できる。

墳丘 耕作によって削平されており、墳丘や盛土については不明である。調査区域内から埋葬施設を確認することはできなかった。

周溝 弧状を呈している。上幅4.57~5.20m、下幅1.80~1.95m、深さ40~86cmで、断面は逆台形である。南西部(A-A'付近)の上幅が5.20mで最も広い。同じく南西部(I-I'付近)の深さが40cmで最も浅く、溝底との比高は約40cmである。それ以外は、幅・深さともにはば均等に掘られている。溝底はほぼ平坦で、壁は南西部で墳丘側・外側ともに緩やかに立ち上がり、それ以外は外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

周溝土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ローム粒子中量

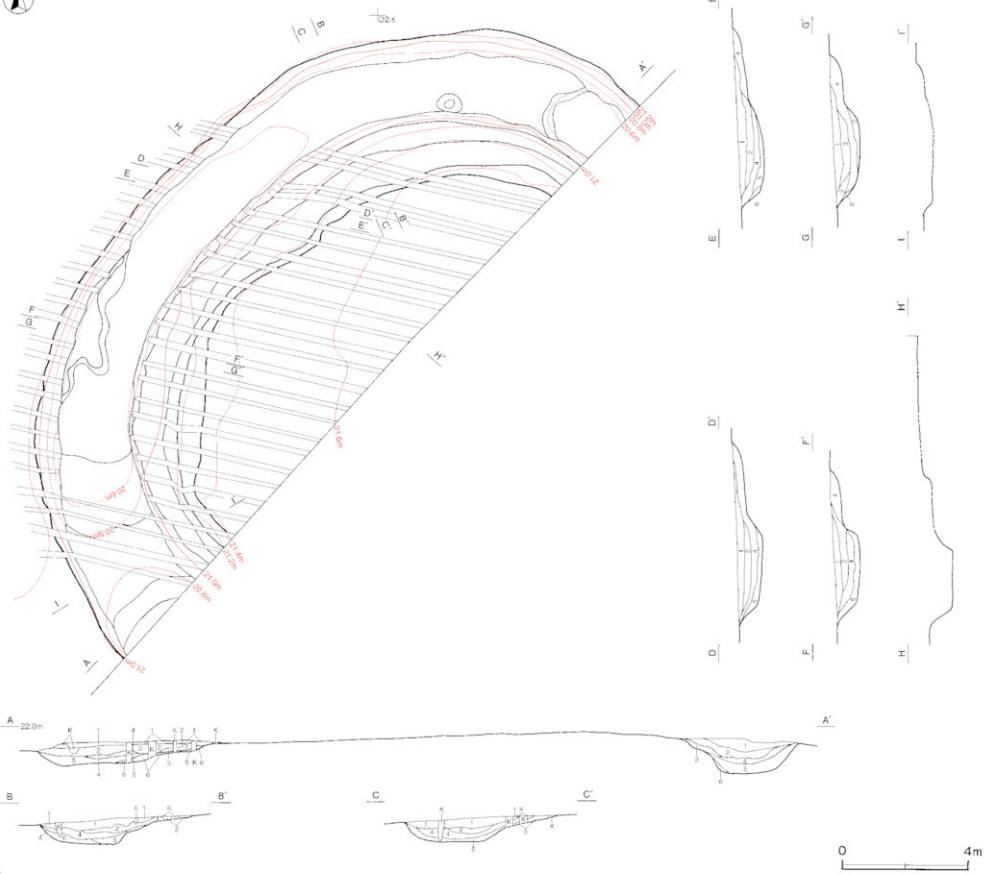
遺物出土状況 土器器片477点(堵2、高坏1、壺474)が、周溝西部から南西部にかけての墳丘側の底面から覆土中層にかけて集中して出土している。そのほか、繩文土器片103点(深鉢)も出土している。13・15は西部の底面から正位でそれぞれ出土している。14は西部の底面からそれぞれ出土した破片3点が接合したものである。18は西部の覆土下層から斜位で出土している。19は南西部の墳丘側の壁面から、20は覆土下層から中層にかけてそれぞれ出土している。17は南西部の覆土中層から土圧で潰れた状態で出土している。16・17の破片1点ずつが、西部の覆土中層からそれぞれ出土しているが、後世の搅乱によって移動したものとみられる。20は北部の墳丘側の覆土下層と中層からそれぞれ出土した破片2点が接合したものである。13・15・18・19は、周溝の底面や墳丘側の壁面から覆土下層にかけて出土していることから、墳丘の縁辺に置かれていたものが、周溝に土砂が堆積する過程でそれぞれ転落したと考えられる。16・17・20は周溝の覆土下層から中層にかけて出土していることから、周溝がある程度埋まってからそれぞれ転落したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から4世紀中葉に比定できる。土器が周溝の西側から集中して出土していることから、墳丘西部は埋葬時に祭祀行為を行った場所と考えられる。周溝の南西部の底が他より浅くなっていることから、埋葬施設に通じるブリッジであったとみられる。また、周溝の北東部(A-A'付近)から北西部(C-C'付近)にかけて、北西部(C-C'付近)から西部(F-F')にかけて、外縁や内縁に直線的な部分が確認できることから、当古墳築造時に周溝の掘削箇所を分担して作業が行われた可能性が考えられる。

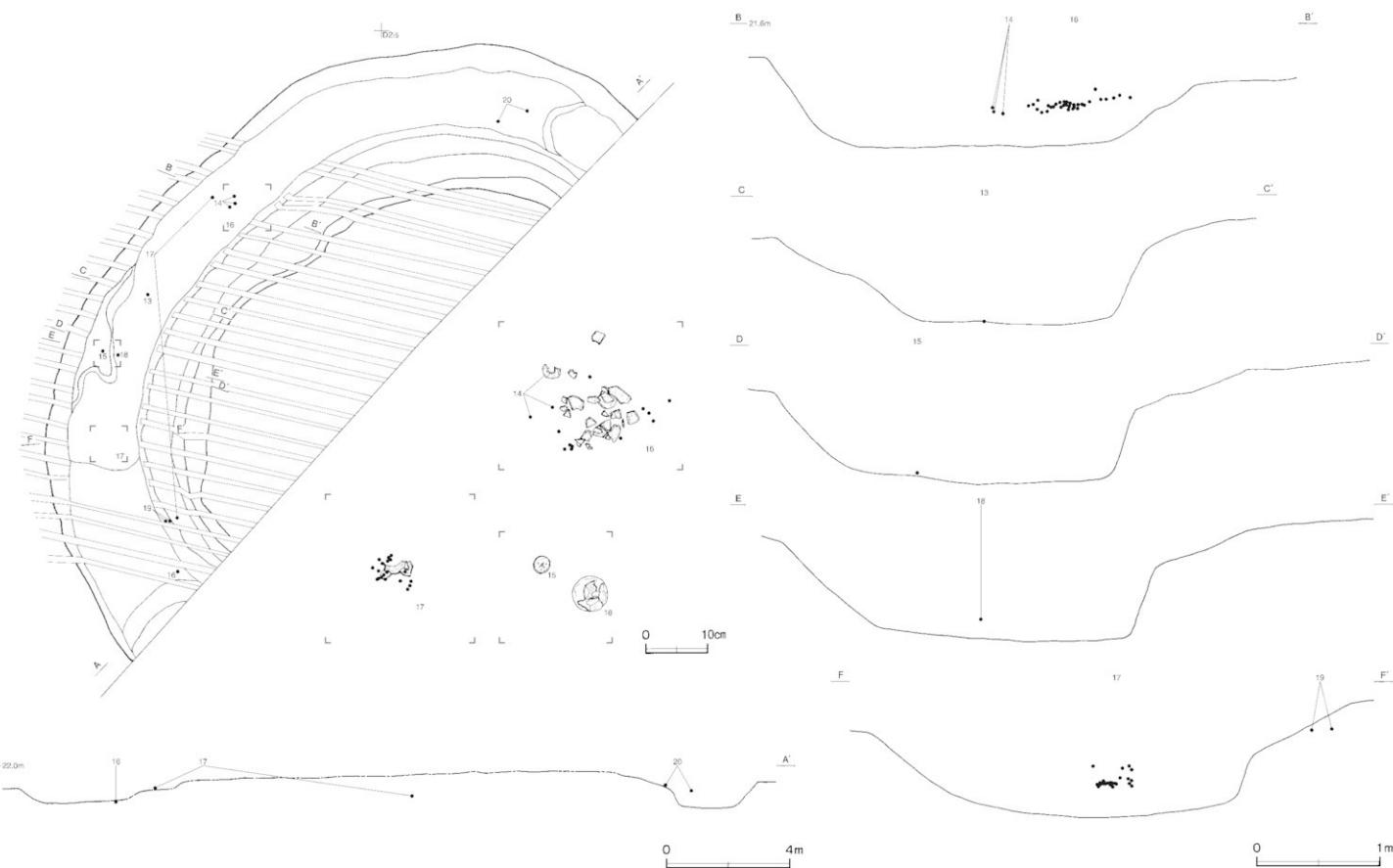
第13号墳出土遺物観察表 (第18~19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	特徴	出土位置	備考
13	土器器	壺	129	47	—	長石・石英・雲母	にぬ・黄褐色	普通	周溝外・内面横ナメ 体芯外・内面へラ磨き 内面焼成後骨頭から穿孔。外・内面赤彩	周溝底面	100% PL9	
14	土器器	壺	—	(111)	3.4	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体芯外面ハケ目調整後ナメ	周溝底面	60% PL10	
15	土器器	小形壺	—	(47)	13.6	長石・石英・雲母	にぬ・黄褐色	普通	周溝外面壁面のへラ磨き 二段6ヶ所の穿孔 周溝内面ハケ目調整、内面赤彩	周溝底面	60% PL10	

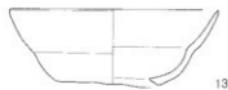
(A)



第16図 第13号墳実測図(1)



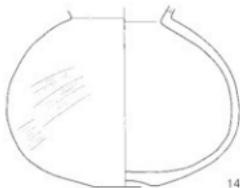
第17図 第13号墳実測図(2)



13



15



14



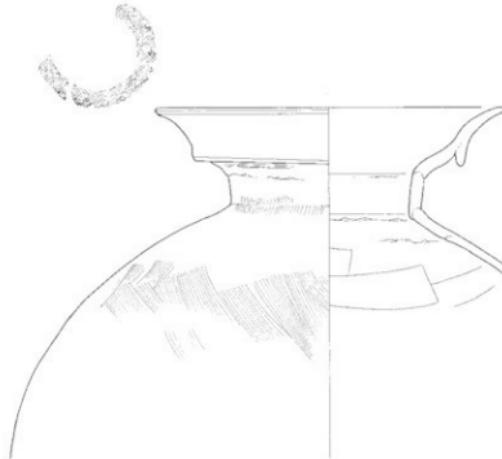
18



19



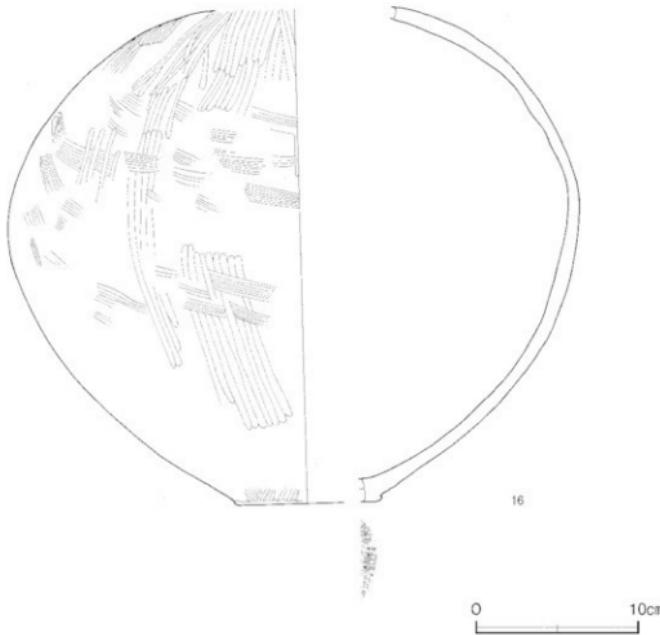
20



17



第18図 第13号墳出土遺物実測図(1)



第19図 第13号墳出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	厚高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 番 号 は か	出土位置	備 考
16	土師器	壺	-	(306)	[86]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にふ・黄褐	普通	体部外面ハケ目調整後縦位のヘラ削き 体部外 面赤彩痕	周溝覆土下層 ～中層	30% PL10
17	土師器	壺	21.2	(217)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 前部外表面側方向のナデ 底部外表面ハケ目調整	周溝覆土中層	30% PL10
18	土師器	壺	180	278	[70]	長石・石英・雲母	にふ・黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 前部・体部外面上半ハ ケ目調整後ヘラ削き 体部外面上半ハ ケ目調整後ヘラ削き	周溝覆土下層	70% PL 9
19	土師器	壺	-	(20)	[9.2]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外侧面下端ヘラナタ 体部内斜下端ハケ目調 整後ヘラ削き前穿孔	埴丘斜面	5% PL10
20	土師器	壺	-	(15)	75	長石・石英・雲母・黒色粒子	明赤褐	良好	体部外侧面下端ヘラ削り 底部焼成前穿孔	周溝覆土下層 周溝覆土中層	5% PL10

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、伴う遺物が出土していないことから、時期が明らかでない炉跡6基、土坑25基、溝跡3条、ピット群6か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 炉跡

第1号炉跡（第20図）

位置 調査区東部のC 3 h2 区、標高 21.0 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径 0.48 m、短径 0.45 m の円形である。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面か

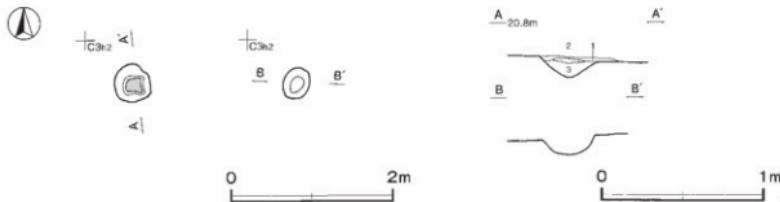
らの深さは14cmである。炉床面は、火熱を受けて赤変している。

覆土 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 1 にふい赤褐色 塗土ブロック・ローム粒子少量 灰化粒子微量 | 3 黄褐色 ローム粒子中量 塗土粒子微量 |
| 2 にふい赤褐色 ローム粒子・塗土粒子少量 | |

所見 周辺に第1号ピット群のP1・P2があることから、堅穴建物跡に伴う炉の可能性が考えられるが、柱穴の配置等が捉えられないため断定できない。時期は、出土遺物がないため不明である。



第20図 第1号炉跡実測図

第2号炉跡（第21図）

位置 調査区東部のC3h2区、標高21mほどの台地縁辺部に位置している。

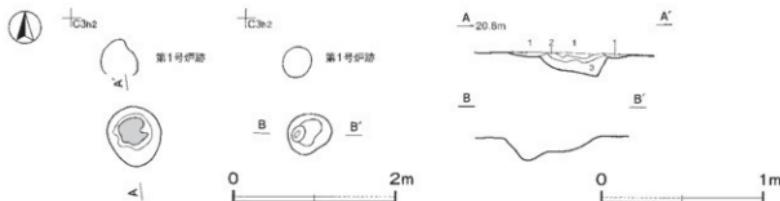
規模と形状 長径0.73m、短径0.65mの楕円形で、長径方向はN-8°-Wである。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面からの深さは15cmである。炉床面は、火熱を受けて赤変している。

覆土 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 1 にふい赤褐色 塗土ブロック・ローム粒子少量 灰化粒子微量 | 3 黄褐色 ローム粒子中量 塗土粒子微量 |
| 2 にふい赤褐色 ローム粒子・塗土粒子少量 | |

所見 周辺に第1号ピット群のP1・P2があることから、堅穴建物跡に伴う炉跡の可能性が考えられるが、柱穴の配置等が捉えられないため断定できない。時期は、出土遺物がないため不明である。



第21図 第2号炉跡実測図

第3号炉跡（第22図）

位置 調査区東部のC2i0区、標高20mほどの台地縁辺部に位置している。

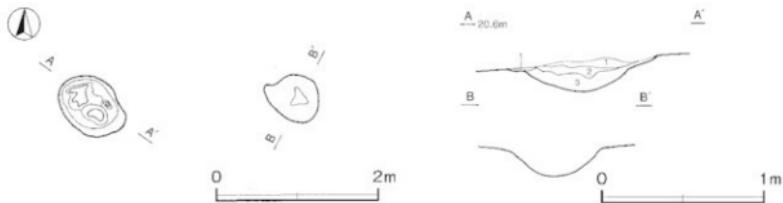
規模と形状 長径0.91m、短径0.68mの楕円形で、長径方向はN-50°-Wである。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面からの深さは18cmである。炉床面は、赤変硬化していない。

覆土 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 帽 赤 暗色 焼土ブロック中量。ローム粒子少量。炭化粒子微量 3 壁 色 ローム粒子中量。焼土粒子微量
2 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

所見 周辺に第1号ピット群のP1・P7・P8があることから、堅穴建物跡に伴う炉跡の可能性が考えられるが、柱穴の配置等が捉えられないため断定できない。時期は、出土遺物がないため不明である。



第22図 第3号炉跡実測図

第4号炉跡（第23図）

位置 調査区東部のC2h0区、標高20mほどの台地縁辺部に位置している。

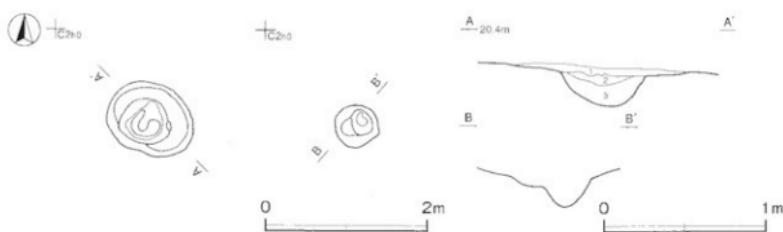
規模と形状 長径1.10m、短径0.88mの楕円形で、長径方向はN-80°-Wである。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面からの深さは23cmである。炉床面は、赤変硬化していない。

覆土 3層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 3 壁 色 ローム粒子中量。焼土粒子微量
2 にぶい赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

所見 周辺に第1号ピット群のP1があることから、堅穴建物跡に伴う炉跡の可能性が考えられるが、柱穴の配置等が捉えられないため断定できない。時期は、出土遺物がないため不明である。



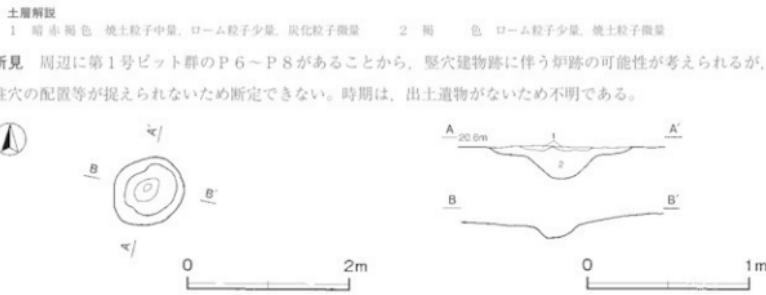
第23図 第4号炉跡実測図

第5号炉跡（第24図）

位置 調査区東部のC2i0区、標高21mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径0.95m、短径0.84mの楕円形で、長径方向はN-28°-Eである。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面からの深さは18cmである。炉床面は、赤変硬化していない。

覆土 2層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。



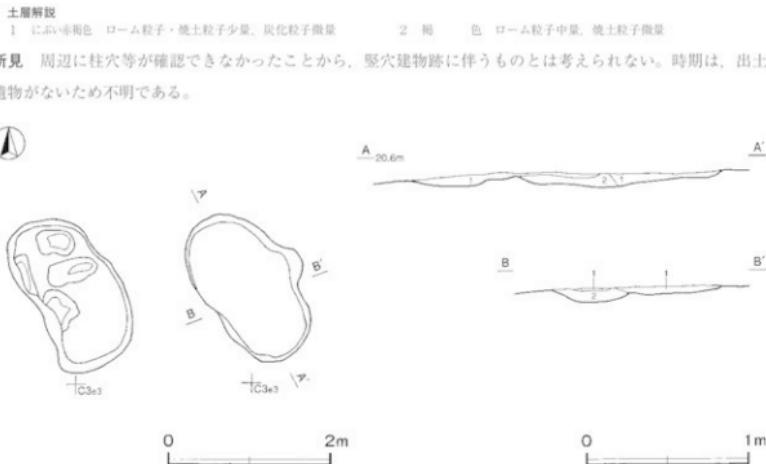
第24図 第5号炉跡実測図

第6号炉跡（第25図）

位置 調査区東部のC 3d2区、標高20 mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 長径1.98 m、短径1.25 mの不整椭円形で、長径方向はN-30°-Eである。掘方底面が炉床面で、皿状にくぼんでおり、確認面からの深さは8 cmである。炉床面は、赤変硬化していない。

覆土 2層に分層できる。周囲からの流入による堆積状況を示していることから、自然堆積である。



第25図 第6号炉跡実測図

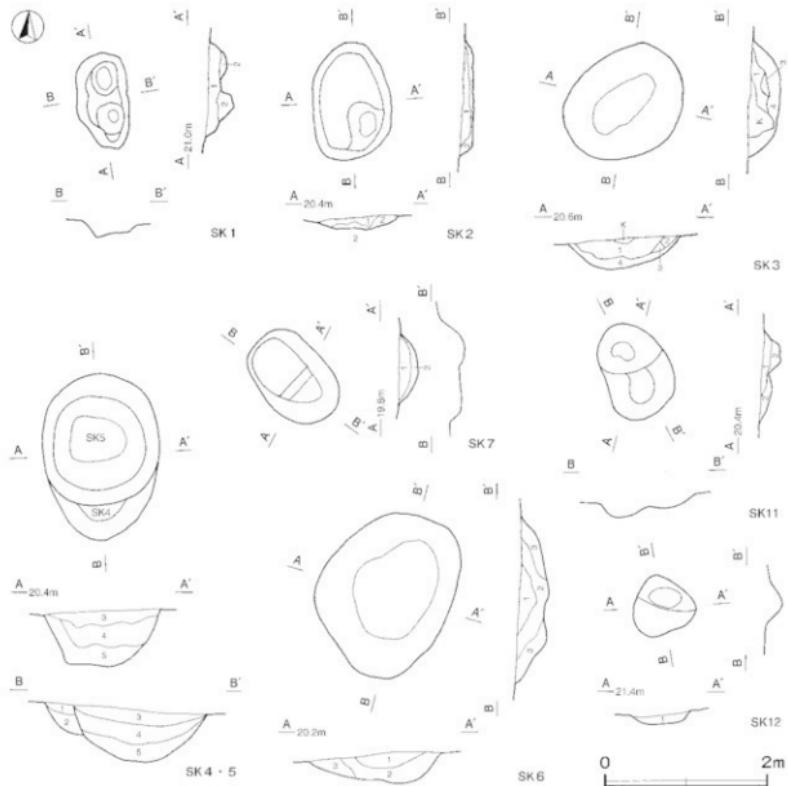
表3 その他の炉跡一覧表

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		炉床面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)				
1	C 3h2	-	円形	0.48 × 0.45	14	皿状	自然		

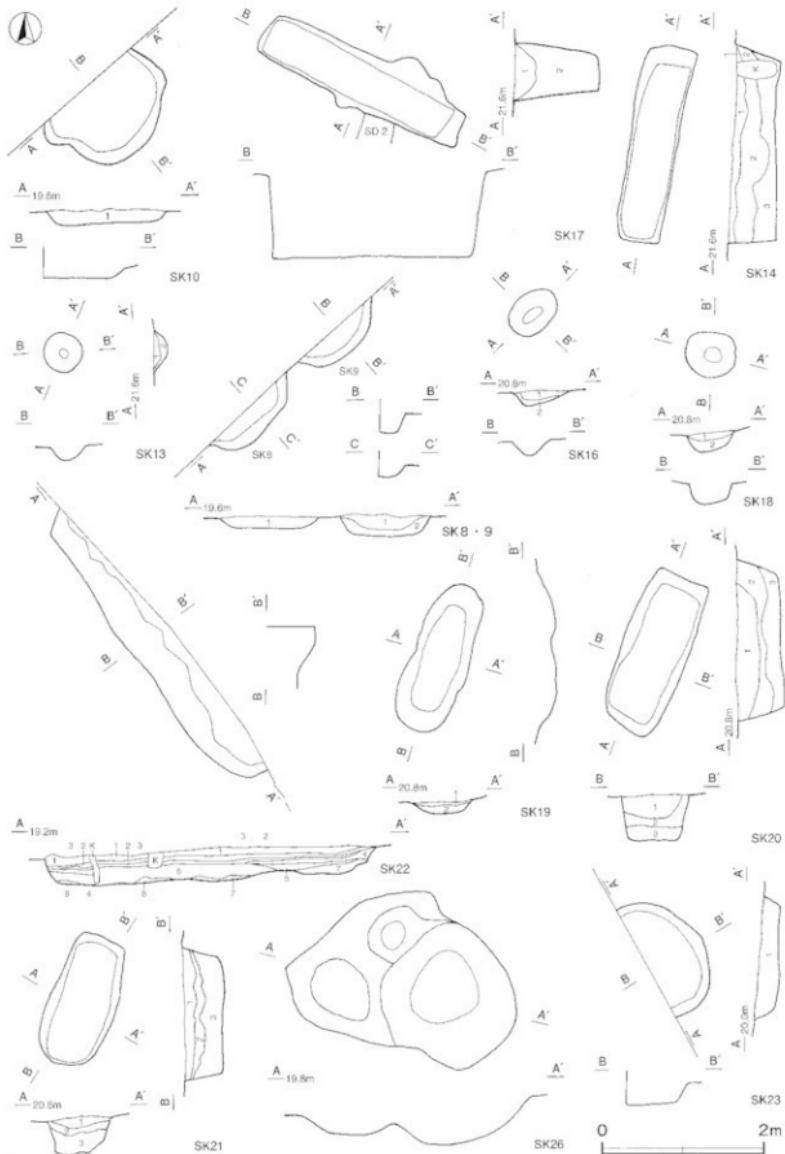
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		鉢床面 状況	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
2	C 3 d2	N - 8° - W	椭円形	0.73 × 0.65	15	圓状	自然		
3	C 2 d0	N - 50° - W	椭円形	0.91 × 0.68	18	圓状	自然		
4	C 2 d0	N - 50° - W	椭円形	1.10 × 0.88	23	圓状	自然		
5	C 2 d0	N - 28° - E	椭円形	0.95 × 0.84	18	圓状	自然		
6	C 3 d2	N - 30° - E	不整格円形	1.98 × 1.25	8	圓状	自然		

(2) 土坑

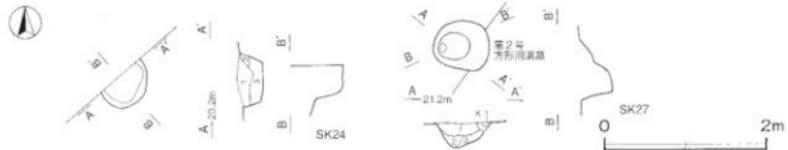
今回の調査で、時期・性格ともに不明の土坑 25 基を確認した。規模・形状等については一覧表で、平面図・土層断面図（第 26 ~ 28 図）・土層解説については遺構番号順に掲載する。



第 26 図 その他の土坑実測図(1)



第27図 その他の土坑実測図(2)



第28図 その他の土坑実測図(3)

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、砂粒微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒微量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒微量

第5号土坑土層解説

- 3 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒微量

第8号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第10号土坑土層解説

- 1 明褐色 ローム粒子中量、燒土粒子微量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒微量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第19号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第21号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、繊維微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量
- 5 黑褐色 炭化物・ローム粒子・燒土粒子少量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 7 にい青褐色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、燒土粒子少量

第23号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第24号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック少量
- 3 黑褐色 ロームブロック中量

第27号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量、燒土粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量

表4 その他の土坑一覧表

番号	位置	長軸(往)方向	平面形	規模(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(往)×	短軸(往)						
1	D 2d7	N - 11° - W	楕円形	120	0.65	25 ~ 35	外傾 板斜	凸	人為		
2	D 2b7	N - 1° - W	楕円形	145	0.96	10 ~ 20	板斜	平坦	人為	縄文土器片	
3	D 2b7	N - 46° - E	楕円形	158	1.30	37	板斜	皿状	人為		
4	D 2b7	N - 1° - E	【不定形】	110	×(0.42)	35	板斜	皿状	人為		本跡→SK5
5	D 2a7	N - 1° - E	楕円形	160	1.45	69	板斜	皿状	自然	縄文土器片	SK 4→本跡
6	D 2a7	N - 14° - E	楕円形	206	1.64	39	板斜	皿状	人為		
7	C 2b6	N - 47° - W	楕円形	127	0.85	18 ~ 28	板斜	傾斜	自然		
8	C 2b5	-	【不定形】	123	×(0.33)	14	板斜	平坦	自然		
9	C 2b5	-	【不定形】	115	×(0.32)	24	板斜	平坦	自然		
10	C 2b6	-	【不定形】	166	×(1.00)	16	板斜	平坦	自然		
11	D 2a6	N - 15° - W	楕円形	125	0.85	15 ~ 25	板斜	凸	人為		
12	D 2a5	-	不定形	0.74	× 0.73	22	板斜	皿状	自然		
13	D 2g6	-	円形	0.50	× 0.49	18	板斜	皿状	人為		
14	D 2a2	N - 11° - E	隅丸長方形	245	× 0.57	53	直立 外傾	平坦	人為	土器片	
16	D 2d4	N - 49° - E	楕円形	0.68	× 0.48	19	板斜	皿状	自然		
17	D 2a8	N - 63° - W	不定形	225	× 0.67	106	直立	平坦	人為		SD 2→本跡
18	E 1a9	-	円形	0.65	× 0.63	26	外傾	皿状	人為		
19	E 1a9	N - 21° - E	隅丸長方形	190	× 0.73	25	板斜	皿状 (有段)	人為	土器片	
20	D 2d4	N - 22° - W	隅丸長方形	197	× 0.84	55	外傾 板斜	平坦	人為		
21	D 1b0	N - 15° - E	隅丸長方形	165	× 0.80	45 ~ 50	外傾	平坦	人為		
22	B 2b0	N - 40° - W	【不定形】	(402)	× (0.61)	32 ~ 43	外傾	凸	人為		
23	C 3a1	N - 35° - W	【楕円形】	155	× (0.75)	20 ~ 40	外傾	平坦	自然		
24	C 2a9	N - 25° - E	【円形】	0.20	× 0.38	50	外傾	平坦	人為		
26	C 2a7	N - 72° - W	不定形	290	× 1.95	20 ~ 60	板斜	凸	人為		
27	C 3b3	N - 50° - W	円形	0.64	× 0.70	40	板斜	皿状	人為		第2号方形坑溝第 →本跡

(3) 溝跡

今回の調査で、時期不明の溝跡3条を確認した。以下、遺構の特徴について記述する。

第1号溝跡（第29図）

位置 調査区中央部のD 2a8～D 2g9区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 D 2g9区から北西方向(N - 60° - W)に直線状に延び、第2号溝跡を掘り込んで収束している。

南東端部が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは3.22mである。上幅0.59～0.71m、下幅0.12～0.15m、深さ58～68cmで、ほぼ一定である。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

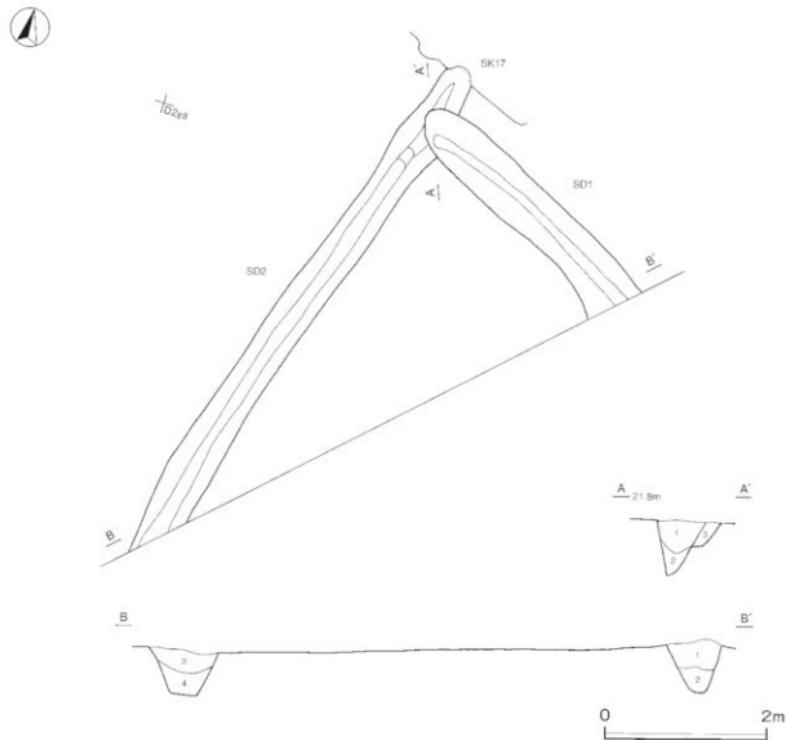
覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 級 白色 ロームブロック少量

2 級 白色 ロームブロック中量

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。地籍図の筆境とはほぼ一致していることから、区画溝と考えられる。



第29図 第1・2号溝跡実測図

第2号溝跡（第29図）

位置 調査区中央部のD 2 f8-D 2 h8区、標高22mほどの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第17号土坑、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 D 2 f8区から南方方向（N = 163° - W）に直線状に延び、調査区域外へ延びている。南部が調査区域外へ延びているため、確認できた長さは7.23mである。上幅0.45～0.53m、下幅0.10～0.20m、深さ30～56cmで、溝底は南部が最も低く、北部との比高は26cmである。断面は逆台形で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

3 暗褐色 ロームブロック少量

4 黄褐色 ロームブロック中量

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。地籍図の筆境とほぼ一致していることから、区画溝と考えられる。第1号溝に掘り込まれているが、形状や堆積土からあまり時期差はないと思われる。

第3号溝跡（第30図）

位置 調査区中央部のD 2b6～D 2i7区、標高21mほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 D 2b6区から北方向（N-6°-W）に直線状に延び、D 2b6区で収束している。南端部が調査区域外に延びているため、確認できた長さは5.74mである。上幅0.70～0.92m、下幅0.64～0.72m、深さ8cmで一定である。断面は浅いU字形で、壁は緩やかに立ち上がっている。

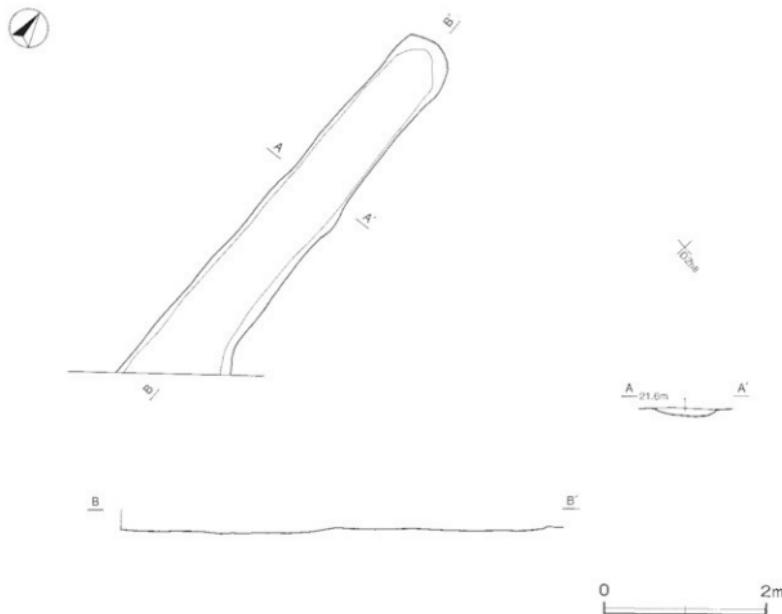
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 繩文土器片1点（深鉢）、土師器片2点（壺カ）が覆土中から出土している。いずれも覆土に混入したと見られる。

所見 伴う遺物がなく、確認できた規模もわずかであるため、時期・性格ともに不明である。



第30図 第3号溝跡実測図

表5 その他の溝跡一覧表

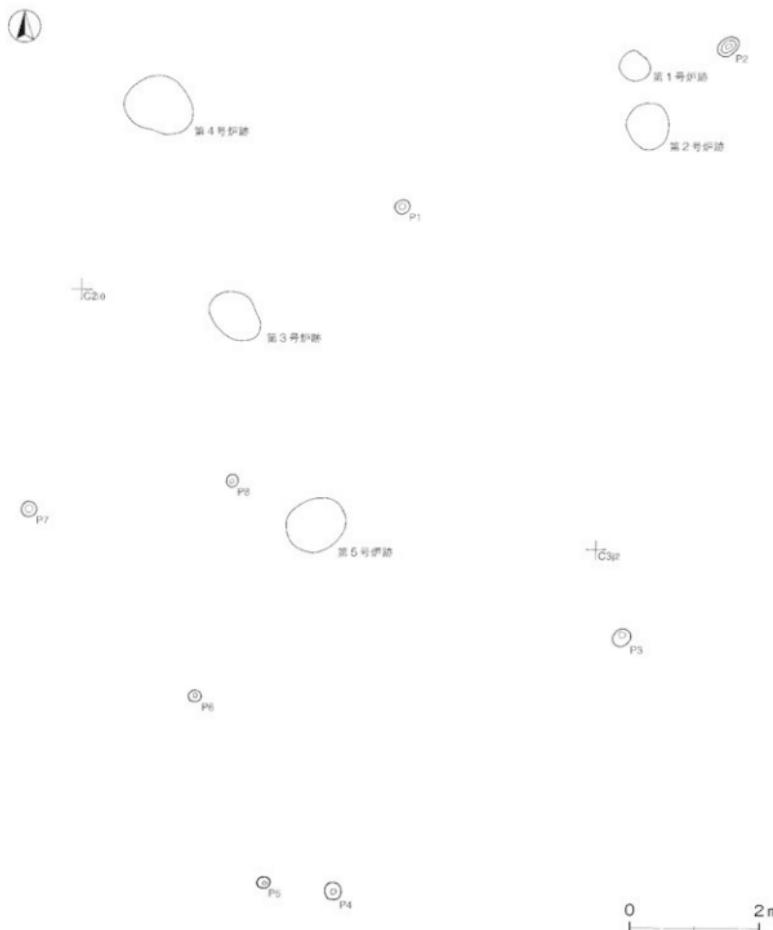
番号	位置	方向	形状	規 模			断面形	前面	底面	覆土	主な出土 遺物	備考 重複関係(右→左)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)						
1	D 2b8～ D 2i9	N-6°-W	直線状	(3.22)	0.59-0.71	0.12-0.15	58-68	凸台形	外傾	圭形T字	人為	SD 2→多段
2	D 2b8～ D 2b8	N-163°-W	直線状	(7.20)	0.45-0.53	0.10-0.20	30-56	凸台形	外傾	圭形T字	人為	本跡→SK17, SD1
3	D 2b6～ D 2i7	N-6°-W	直線状	(5.74)	0.70-0.92	0.64-0.72	8	浅いU字形	緩斜	平頭 (小切欠)	人為	縄文土器、土師器

(4) ピット群

今回の調査で確認した、時期不明のピット群6か所については、ピットごとの計測表と平面図を掲載する。

第1号ピット群（第31図）

位置 調査区東部の標高21 mほどで、C 2 h9～D 3 a2 区にかけての東西11 m、南北14 mの範囲から、柱穴状のピット8か所を確認した。



第31図 第1号ピット群実測図

規模 平面形は長径 20 ~ 37cm の円形または梢円形で、深さが 4 ~ 40cm である。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。

第1号ピット群ピット計測表

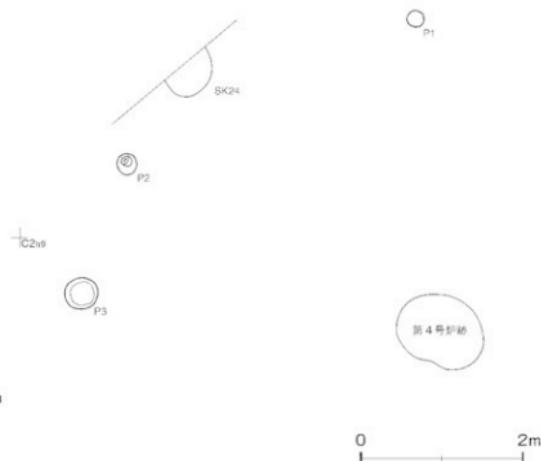
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	C 3 h1	円形	27	26	18	5	D 2 g0	円形	20	19	4
2	C 3 h2	梢円形	37	28	17	6	C 2 j0	梢円形	23	19	21
3	C 3 j2	梢円形	30	25	-	7	C 2 i9	梢円形	28	22	40
4	D 2 a0	梢円形	31	22	12	8	C 2 i0	円形	20	20	28

第2号ピット群（第32図）

位置 調査区東部の標高 20 m ほどで、C 2 g8 ~ C 2 h0 区にかけての東西 5 m、南北 5 m の範囲から、柱穴状のピット 4 か所を確認した。

規模 平面形は長径 20 ~ 45cm の円形または梢円形で、深さが 35 ~ 50cm である。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。



第32図 第2号ピット群実測図

第2号ピット群ピット計測表

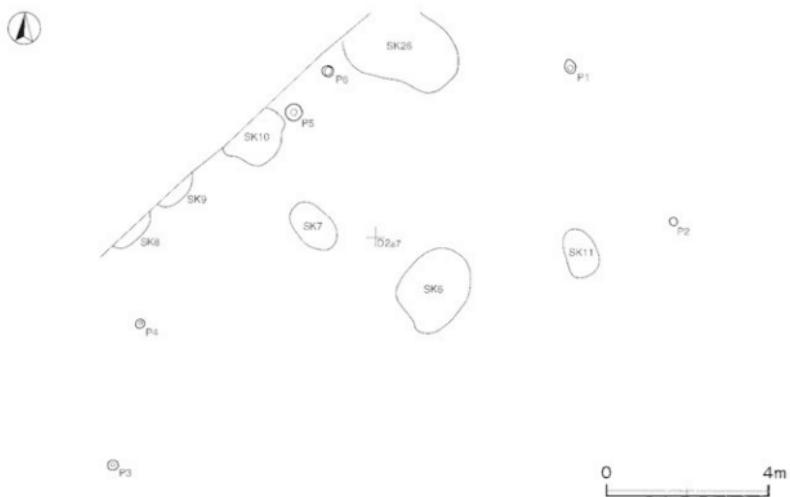
番号	位置	形状	規模(cm)			番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	C 2 g0	円形	20	19	-	3	C 2 b9	楕円形	45	40	35
2	C 2 g9	楕円形	28	25	43	4	C 2 b8	楕円形	42	28	50

第3号ピット群 (第33図)

位置 調査区中央部の標高20mほどで、C 2 15～D 2 b8区にかけての東西14m、南北10mの範囲から、柱穴状のピット6か所を確認した。

規模 平面形は長径20～45cmの円形または楕円形で、深さが3～93cmである。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。



第33図 第3号ピット群実測図

第3号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模(cm)			番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	C 2 18	楕円形	36	27	93	4	D 2 a5	円形	28	28	4
2	C 2 18	円形	20	20	-	5	C 2 16	円形	45	44	18
3	D 2 b5	円形	31	29	3	6	C 2 15	円形	30	29	91

第4号ピット群（第34図）

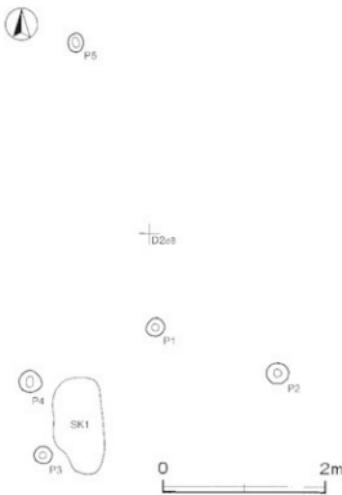
位置 調査区中央部の標高21mほどで、D 2c7～D 2d8区にかけての東西3m、南北5mの範囲から、柱穴状のピット5か所を確認した。

規模 平面形は長径23～30cmの円形または梢円形で、深さが9～22cmである。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。

第4号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ
1	D 2d8	円形	23	23	12
2	D 2d8	円形	28	26	10
3	D 2d7	円形	23	22	14
4	D 2d7	円形	30	28	22
5	D 2c7	梢円形	28	20	9



第34図 第4号ピット群実測図

第5号ピット群（第35図）

位置 調査区中央部の標高21mほどで、D 2f8区の東西2m、南北2mの範囲から、柱穴状のピット5か所を確認した。

規模 平面形は長径36～57cmの円形、梢円形または不整梢円形で、深さが13～29cmである。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。

第5号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ
1	D 2f8	不整梢円形	57	35	13・29
2	D 2f8	梢円形	36	32	15・21
3	D 2f8	不整梢円形	51	34	17・19
4	D 2f8	梢円形	46	29	20・25
5	D 2f8	不整梢円形	51	33	22



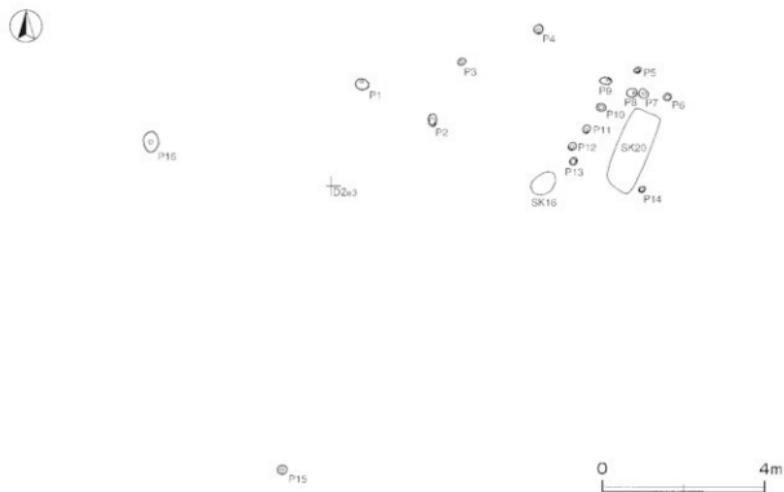
第35図 第5号ピット群実測図

第6号ピット群（第36図）

位置 調査区西部の標高20mほどで、D 2d1～D 2d5区にかけての東西13m、南北11mの範囲から、柱穴状のピット16か所を確認した。

規模 平面形は長径18～55cmの円形または楕円形で、深さが9～83cmである。

所見 出土遺物がないため時期は不明である。また、ピットの配置に規則性が認められず、建物跡を想定することはできない。



第36図 第6号ピット群実測図

第6号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模(cm)			番号	位置	形状	規模(cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	D 2d3	楕円形	32	29	50	9	D 2d4	楕円形	29	19	20
2	D 2d3	楕円形	33	21	36	10	D 2d4	楕円形	26	21	23
3	D 2d3	楕円形	20	18	62	11	D 2d4	楕円形	20	17	23
4	D 2d4	楕円形	25	22	10	12	D 2d4	円形	20	20	18
5	D 2d4	楕円形	19	17	25	13	D 2d4	楕円形	20	18	13
6	D 2d5	楕円形	18	16	16	14	D 2e4	円形	18	18	9
7	D 2d4	円形	23	21	30	15	D 2g1	円形	24	24	34
8	D 2d4	楕円形	27	22	30	16	D 2d1	楕円形	35	42	83

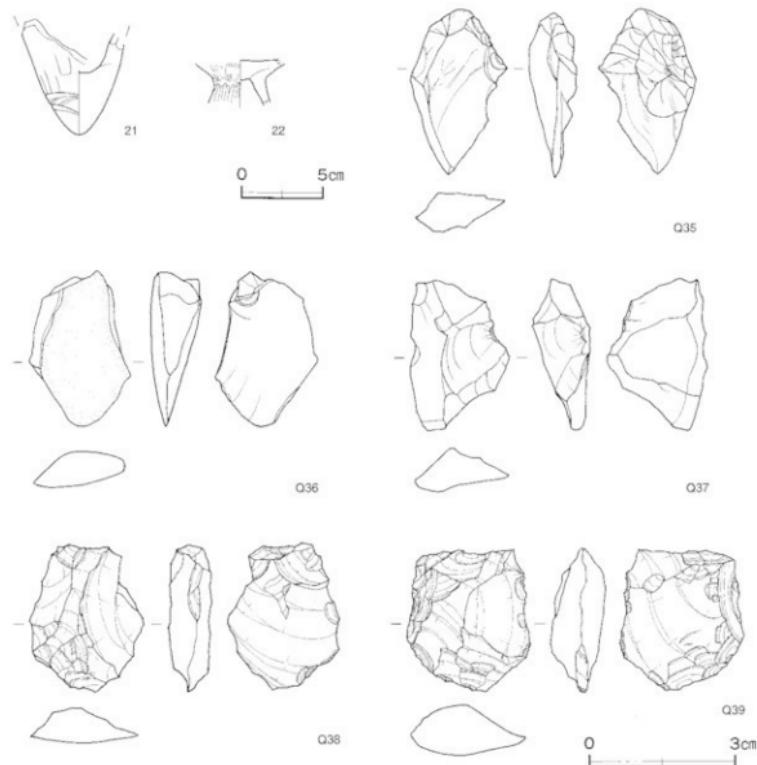
表6 その他のピット群一覧表

番号	位置	柱穴（長さの単位はすべてcm）					主な出土遺物	時期	備考 重複関係（古→新）
		柱穴数	平面形	長径	短径	深さ			
1	C 2h9～D 3a2	8	円形・楕円形	20～37	19～28	4～40			

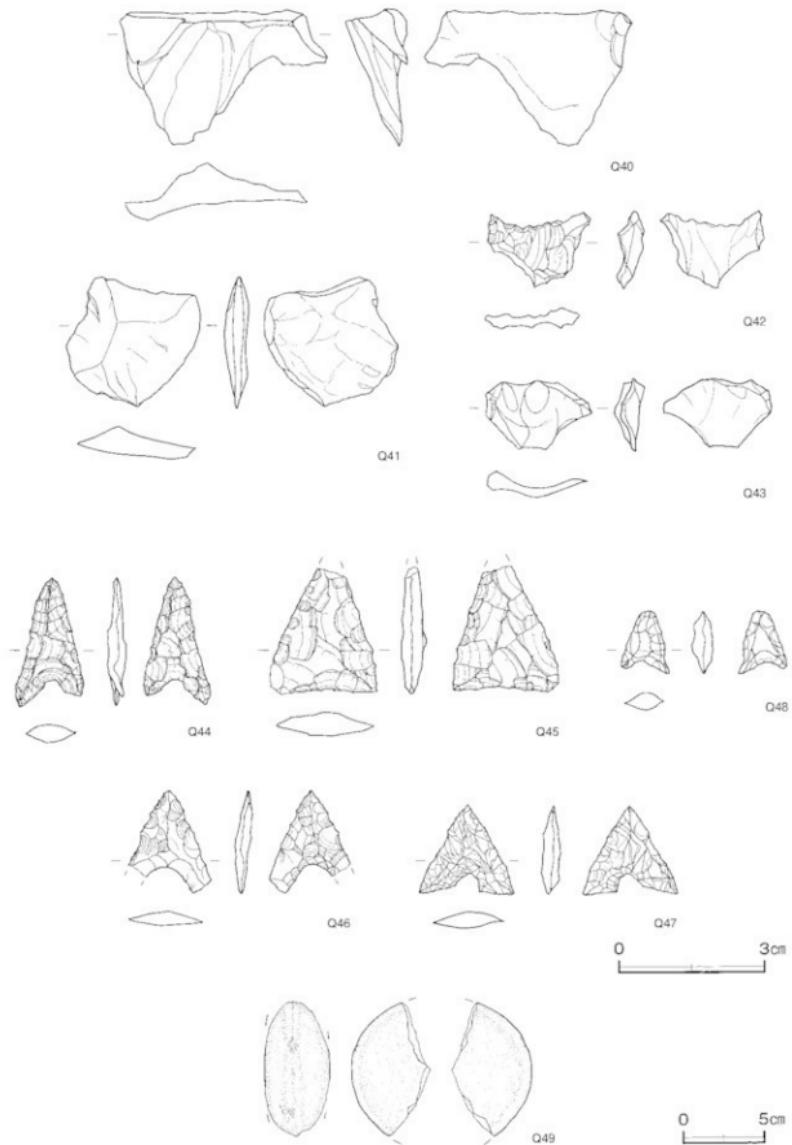
番号	位置	柱穴（長さの単位はすべてcm）				主な出土遺物	時期	備考（古→新）
		柱穴数	平面形	長径	短径			
2	C 2 g8 ~ C 2 b6	4	円形・楕円形	20 ~ 45	19 ~ 40	35 ~ 50		
3	C 2 b5 ~ D 2 b8	6	円形・楕円形	20 ~ 45	20 ~ 44	3 ~ 93		
4	D 2 c7 ~ D 2 d8	5	円形・楕円形	23 ~ 30	20 ~ 28	9 ~ 22		
5	D 2 b8	5	円形・楕円形・不整形・楕円形	36 ~ 57	29 ~ 35	13 ~ 29		
6	D 2 d1 ~ D 2 e5	36	円形・楕円形	18 ~ 55	16 ~ 42	9 ~ 83		

(5) 遺構外出土遺物 (第37図・38図)

今回の調査で、出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第37図 遺構外出土遺物実測図(1)



第38図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第37・38図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊 ほ か	出土位置	備 考
21	縄文土器	尖底土器	-	(7.2)	-	長石・石英	明黄褐	普通	外面ヘラナデ 爛旋状の沈窪	表土	10% PL11
22	土師器	器台	-	(2.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外周外面ハケ目 内面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ	表土	10% PL11

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考	
Q 35	剥片	334	199	1.00	4.89	チャート	上端部に原石面残置 二次加工痕有り	第3号方形周溝Ⅱ	PL11	
Q 36	剥片	319	212	1.05	6.72	チャート	縦長剥片 上端部に打点部残存 片端に原石面を残置	第3号方形周溝Ⅲ		
Q 37	剥片	308	206	1.18	4.97	チャート	右側縁に打点部残存 二次加工痕あり	第2号方形周溝Ⅰ		
Q 38	剥片	306	233	0.91	5.45	チャート	縦長剥片 二次加工痕有り	TM 13	PL11	
Q 39	剥片	287	251	1.14	7.93	チャート	上端部・左側縁に打点部残存 二次加工・微細消磨は認められない	TM 13	PL11	
Q 40	剥片	279	428	1.29	7.18	チャート	上面に原石面を残置 二次加工・微細消磨は認められない	第2号方形周溝Ⅲ		
Q 41	剥片	266	272	0.48	3.22	頁岩	右側縁に原石面を残置	TM 13		
Q 42	剥片	167	209	0.54	0.90	黒曜石	縦長剥片	第2号方形周溝Ⅲ		
Q 43	剥片	141	213	0.64	0.66	チャート	上端部に打点部残存	TM 13		
Q 44	礫	269	1.41	0.37	0.81	チャート	両面消磨調整	第2号方形周溝Ⅲ	PL11	
Q 45	礫	(258) (211)	0.57	(2.26)	頁岩	先端部欠損 両面消磨調整	TM 13	PL11		
Q 46	礫	206	(1.70)	0.39	(0.81)	黒曜石	一部欠損 両面消磨調整	第2号方形周溝Ⅲ	PL11	
Q 47	礫	175	195	0.35	0.77	チャート	両面消磨調整	第2号方形周溝Ⅲ	PL11	
Q 48	礫	128	0.97	0.39	0.33	チャート	両面消磨調整	TM 13	PL11	
Q 49	磨石	(834) (507)	(398)	(166.5)	凝灰岩	欠損 全面磨痕 両面に敲打痕	TM 13	PL11		

第39図 面野井古墳群遺構全体図

第4節 まとめ

1はじめに

面野井古墳群は、谷田川左岸の台地縁辺部に南北1km以上にわたって所在する。かつては27基の古墳が存在したとされていたが、その後つくば市教育委員会の調査によって古墳時代後期を中心とした、前方後円墳1基と円墳7基からなる古墳群とされている。今回の調査分を含めると、現在その確認数は14基に増加している。¹⁾

今回報告する調査区域は、当古墳群の北端部に位置し、確認した遺構は古墳時代前期の方形周溝墓4基、円墳1基及び時期不明の炉跡6基、土坑25基、溝跡3条、ピット群6か所である。

本節では、今までに当古墳群では確認されていなかった、古墳時代前期の方形周溝墓及び円墳に注目し、埋葬施設を確認した第2号方形周溝墓及び円墳である第13号墳と、それぞれの出土遺物を中心に若干の考察を加えてまとめとしたい。なお、方形周溝墓及び円墳の時期については、当財団『研究ノート』及び報告書に掲載された県南地域における土器編年研究²⁾を参考にするとともに、墳墓からの出土土器という特異性や当古墳群の位置と環境及び文化の伝播経路等を考慮して、千葉県市原市に所在する草刈遺跡群・古墳群出土土器を標準とする編年研究³⁾を踏まえながら検討を行った。

2古墳時代前期の方形周溝墓と円墳

(1) 方形周溝墓群と円墳

方形周溝墓4基とも、調査区域東部の台地縁辺部で確認した。そのうち周溝の一部のみを確認したもの1基を含むが、群を成すようにそれぞれが近接して所在している。重複関係はなく、周溝が全周する隅丸方形または隅丸長方形の形状のものと推定できる。長軸方向はN=20~50°-Eとはば揃っている。これらのことから、今回は確認できなかったが、この地域には、一定期間生活を営んでいた単位集団が存在し、この地を墓域と定めて計画的に方形周溝墓を築造したことが想定できる。方形周溝墓4基とも築かれた時期は、出土土器の形状や特徴から、4世紀前葉と考えられる。中でも第2号方形周溝墓の規模は最も大きく、周溝を含めた外法が一辺16mを超え、中央部で埋葬施設を確認した。集団の長の墓とみることができるであろう。

円墳は、方形周溝墓群から南西へ約30mの位置で確認した。南東半部が調査区域外に延びているため、確認できた最大径は周溝も含めて24mを超える。調査区域内で埋葬施設を確認することはできなかった。築造された時期は、周溝内から出土した土器から4世紀中葉と考えられる。東部で確認した方形周溝墓群と大きな時期差はないことから、同一集団が築いた墳墓である可能性が考えられる。今回の調査では、詳細を語ることはできない。

(2) 第2号方形周溝墓と出土遺物

本調査区域で最大規模の方形周溝墓である第2号方形周溝墓の周溝内からは、土師器の壺、壇、壺等が台状部から転落した状態で出土している。これらの出土位置が周溝の北西辺及び南西辺に集中していることから、台状部の北西辺及び南西辺に並べられていたことがわかる。台状部上で、埋葬時の祭祀行為が行われ、被葬者の権威を示す威信財であったと考えられる。台状部は長軸11.87m、短軸10.22mの隅丸長

方形を呈し、中央部には掘方が長軸 283 m、短軸 0.67 m で隅丸長方形を呈する埋葬施設が構築されている。長軸方向は、本跡の長軸方向から更に 18° 東に振れている。

周溝内から出土した遺物は全て土師器である。大半が壺で、二重口縁壺、装飾壺、底部穿孔壺など、器形や技法に特徴を有するものが見られる。5 は、頭部が若干外傾して立ち上がり、明瞭な段を有し、口縁部は大きく開き、端部はほぼ水平になっている。3・4 はともに外面及び口縁部内面が赤彩され、折り返し口縁を持ち、器形も類似している。体部上端と口縁部に繩文が施文され、頭部の周囲に円形浮文が付加されている。しかし、3 には口縁部に棒状浮文が等間隔で付加されており、4 とは異なる。3・4 は器形や技法の特徴から、南関東地域の系譜を引くものと考えられる。第3号方形周溝墓出土の壺類にも同様の特徴がみられ、同じ系譜を引くものと考えられる。8・9 は壺の底部で、焼成前に穿孔されていることから、貯蔵具としてではなく墓前への供献品として製作されたものである。2 は平底の壺である。古墳時代前期前葉に丸底の壺と器台が共伴するケースはあるが、平底の壺が出土するケースは珍しい。畿内の布留式古段階の影響を受けた小形の精製土器である。これらの土器の特徴から、第2・3号方形周溝墓は草刈Ⅱ期前半（4世紀前葉）の時期と考えられる。第13号墳は、出土した17の二重口縁壺の頭部から口縁部に至る作りが簡素化され、13の鉢形壺や 15 の濃尾系小形高壺が見られることなどから、草刈Ⅱ期後半（4世紀中葉）の時期と考えられる。

第2号方形周溝墓の埋葬施設からは、勾玉1点（水晶）、管玉33点（凝灰岩20、緑色凝灰岩7、結晶片岩2、蛇紋岩2、赤色チャート2）、鐵製品2点（刀子、不明）、ガラス製品6点（玉1、小玉5）が出土している。これらは、深部までの擾乱や盜掘を免れていたため、被葬者埋葬時の装着状況がわかる状態



第40図 田野井古墳群方形周溝墓及び古墳（内壇）分布図

で出土している。勾玉の石材である水晶の原産地については、独立行政法人産業技術総合研究所地質標本館副館長下川浩一氏の鑑定によれば、現在の山梨県塩山市近郊のことである。原石のままあるいは製品として搬入されたものと考えられる。ガラス玉及びガラス小玉については、株式会社吉田生物研究所に成分分析を委託し、詳細は付章に掲載した。分析結果から、製品として韓半島から伝わったものと考えられる。埼玉県東松山市に所在する反町遺跡では、ガラス小玉及びその鋳型が、それぞれ別の堅穴建物跡から出土している。鋳型に付着していたガラス片と製品であるガラス小玉の成分分析を実施し、ともにカリガラスであり、極めて類似することがわかったため、製品再利用型の玉作工房跡であったとしている。堅穴建物跡の時期は、出土土器から4世紀中葉とされている⁴⁾。当古墳群出土のガラス玉及びガラス小玉も成分はカリガラスであることから、関連する可能性が考えられるが、他地域の遺跡でも鋳型が見つかっていることや搬入ルートが不明であることから、簡単に結びつけることはできない。

3 谷田川と開拓集団

当古墳群の周辺では、弥生時代の集落跡はほとんど確認されていない。その後の古墳時代前期に至っても大規模な集落跡は確認されていない。今回の調査によって、当古墳群の北端部に古墳時代前期の方形周溝墓群及び円墳を確認したことから、長の造墓を行った集落が近接して存在したことは間違いない。

以下、谷田川水系を中心とする中・小河川沿いに確認した方形周溝墓を持つ古墳時代前期の集落で、南関東系の装飾壺が出土している遺跡を挙げてみたい。

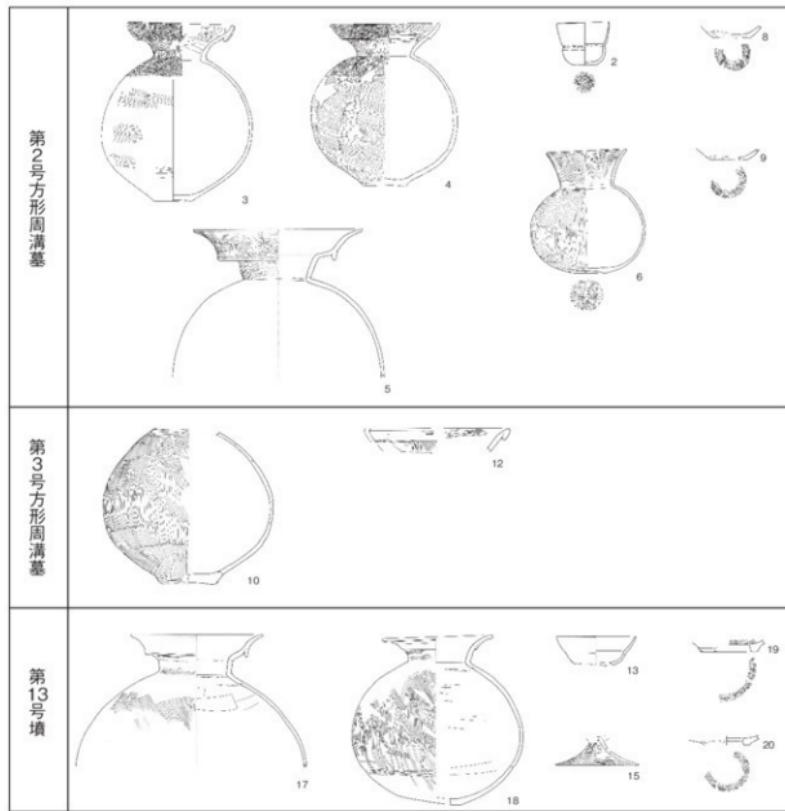
牛久市東部、小野川左岸の台地縁辺部に所在する姥神遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡22棟が確認され、集落に隣接する北部の台地縁辺部で、方形周溝墓3基が確認されている。第2号方形周溝墓からは、体部下半に最大径を有し、頭部は絞られ、折り返し口縁を持ち、口縁部と体部上端に網目状の撚糸文や繩文・沈線文・円形浮文などが施文された南関東系の装飾壺が出土している。⁵⁾

つくば市市南西部、谷田川と西谷田川に挟まれた台地上に立地する境松遺跡では、3世紀末から4世紀初頭にかけての堅穴建物跡27棟が確認され、集落に隣接して方形周溝墓1基が確認されている。堅穴建物跡からは、折り返し口縁を持ち、口縁部及び体部上端には網目状の撚糸文、頭部には円形浮文、口縁部には4条1単位の棒状浮文などが施された南関東系の装飾壺が出土している。⁶⁾

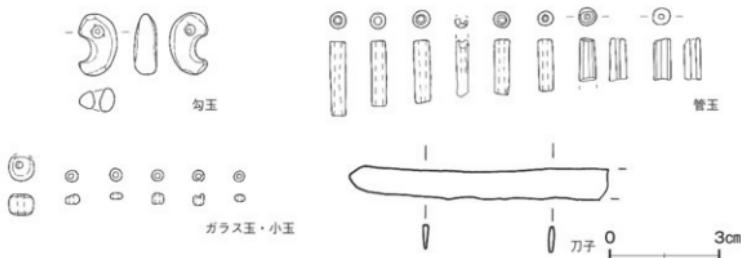
当古墳群から谷田川を3kmほど南に下った、谷田川右岸の台地縁辺部に所在する鳥名前野東遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡12棟が確認され、集落に隣接して方形周溝墓3基が確認されているが、南関東系の土器は確認されなかった。⁷⁾

当古墳群から1.5kmほど東で、谷田川に合流する蓮沼川左岸の台地上に位置する刈間六十日遺跡では、古墳時代前期の堅穴建物跡6棟が確認され、集落に隣接して方形周溝墓2基が確認されている。堅穴建物跡からは、外側が赤彩され、折り返し口縁を持ち、口縁部・頭部には羽状繩文が施文され、体部上端には3段の羽状繩文と2段の連續山形文が交互に施文され、口縁部には棒状浮文、頭部には円形浮文が施された南関東系の装飾壺が出土している。⁸⁾

上記の集落は、谷田川及び周辺の河川沿いの台地上または台地縁辺部に所在している。古墳時代前期に河川を介して他地域からやってきて集落を形成し、周囲を開拓していくと考えられる。しかし、当古墳群の西側の低地を流れる谷田川の川幅は狭く、更に北へと進ると、舟での往来は困難になると思われる。よって、谷田川を利して南関東系の土器を製作する文化を持った集団が、南方から谷田川最奥のこの地にやってきて移住し、開拓していくのではないかと考える。



第41図 第2・3号方形周溝墓、第13号墳周溝出土土器実測図（一部抜粋）

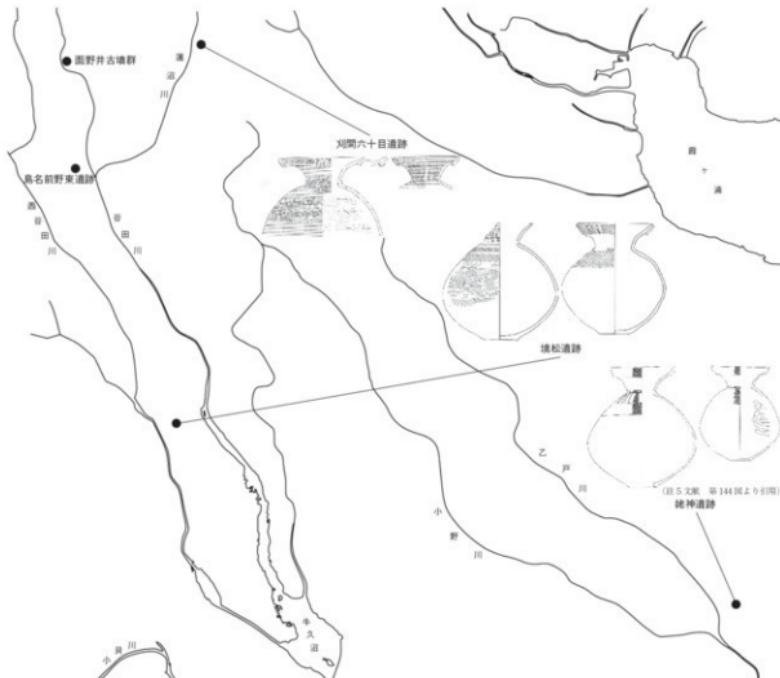


第42図 第2号方形周溝墓埋葬施設出土玉類・鉄製品実測図（一部抜粋）

4 おわりに

面野井古墳群の所在する谷田川上流域は、古墳時代前期初頭に南関東系の文化を持った集団が移住し、集落が形成されていった。当古墳群から下流3kmほどの右岸に所在する島名熊の山遺跡の調査では、古墳時代前期に集落が芽生え、後期の初頭から拡大し始め、後期の中頃には飛躍的に拡大していくことが明らかにされている。古墳時代前期は、谷田川流域に開拓集団が少しずつ流入し、それぞれ点々と集落を営み始める黎明期と見ることができる。

今回の調査で確認した古墳時代前期の方形周溝墓群及び円墳と出土した土器の特徴から、関東一円のみならず中部・東海地方、更には畿内からの影響を受けていることがわかった。文化や技術が伝播するには、広域にわたる人的・物的な交流がなされていたはずである。今回は、南関東の文化が利根川・小貝川・牛久沼・谷田川というという河川や湖沼を介してやってきたのではないかと考えた。他の河川や陸路等、流通経路は様々な可能性がある。今後、土器のみならず、石材やガラスの流通を明らかにする新たな発見の蓄積が望まれるところである。



第43図 谷田川周辺の南関東系土器出土遺跡分布図（国土地理院50,000分の1「土浦」「龍ヶ崎」「佐原」をもとに作成）

註

- 1) 谷田部の歴史編さん委員会「谷田部の歴史」 谷田部町教育委員会 1975年9月
- 2) a 横村宣行「相良式土器編年考－茨城県を中心として－」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1995年3月
b 稲田義弘「熊の山遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」「茨城県教育財团文化財調査報告」第190集 2002年3月
- 3) 加藤修司「上総地方の土器編年案」『研究紀要』21号 財團法人千葉県文化財センター 2012年9月
- 4) a 赤熊浩一・田中広明・大谷徹・上野真由美「反町遺跡Ⅱ」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書」第380集 2011年3月
b 福田聖「反町遺跡Ⅲ」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書」第393集 2012年3月
- 5) 牛久市史編さん委員会「牛久市史刊」(原始・古代・考古資料編-) 牛久市 1999年8月
- 6) 久野俊彦「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 墓松遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第41集 1987年3月
- 7) 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司「烏名前野東遺跡・烏名境松遺跡・谷田部塗跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」「茨城県教育財团文化財調査報告」第191集 2002年3月
- 8) 小澤重雄「葛城一体型土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 六十日遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第160集 2000年3月

参考文献

- ・山岸良二『考古学ライブラリー8 方形周溝墓』ニュー・サイエンス社 1982年5月
- ・山岸良二『関東の方形周溝墓』同成社 1996年12月
- ・北田井克仁『関東における古墳出現期の変革』雄山閣 2001年7月
- ・西川修一『考古学リーダー4 東日本における古墳の出現』六一書房 2005年5月
- ・石川日出志・伊丹徹・黒沢浩・小倉淳一『考古学リーダー5 南関東の弥生土器』六一書房 2005年7月
- ・藤田等『弥生時代ガラスの研究』名著出版 1994年10月
- ・一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 2013年5月

付 章

面野井古墳群出土ガラス玉及びガラス小玉の成分分析調査結果

(株)吉田生物研究所

1はじめに

茨城県つくば市に所在する、面野井古墳群第2号方形周溝墓埋葬施設から出土したガラス玉1点及びガラス小玉4点について、化学組成を明らかにするために、以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

2 試料

調査した試料は表1に示すガラス玉1点及びガラス小玉4点である。(写真1～5)

表1 試料表

※ 1目盛 = 1mm

No.	地 区	道 横	試 料 名	概 要
1	TOK	第2号方形周溝墓埋葬施設	ガラス玉 (G 1)	Φ 7mmの青緑色。風化で亀裂と消滅が見られる。
2	TOK	第2号方形周溝墓埋葬施設	ガラス小玉 (G 2)	Φ 4mmの褐色～紫色。
3	TOK	第2号方形周溝墓埋葬施設	ガラス小玉 (G 3)	Φ 4mmの褐色～紫色。
4	TOK	第2号方形周溝墓埋葬施設	ガラス小玉 (G 4)	Φ 3mmの青緑色。表面風化
5	TOK	第2号方形周溝墓埋葬施設	ガラス小玉 (G 5)	Φ 3mmの青緑色。表面風化

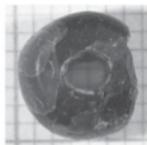


写真1 : No.1

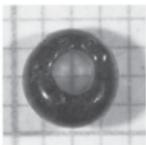


写真2 : No.2

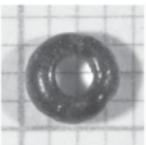


写真3 : No.3

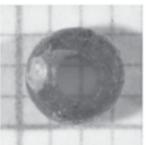


写真4 : No.4

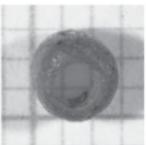


写真5 : No.5

3 方法

試料を非破壊で蛍光X線分析を行い、化学組成を同定した。装置は島津製作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDX-800を用いた。

4 結果

成分分析結果のスペクトルを付す(図1～5)。表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。

No.1のガラス玉及びNo.2～5のガラス小玉は、分析結果から K_2O-SiO_2 系のカリガラスと考えられる。また、No.1のガラス玉及びNo.4・5のガラス小玉は銅(Cu)、No.2・3のガラス小玉はマンガン(Mn)が着色剤として推察される。

表2 面野井古墳群出土ガラス玉及びガラス小玉成分分析結果一覧表

元素	No.1 (wt%)	No.2 (wt%)	No.3 (wt%)	No.4 (wt%)	No.5 (wt%)
Al ₂ O ₃	6.25	2.87	4.65	4.09	4.43
SiO ₂	71.84	63.02	60.25	62.34	63.51
SO ₃	4.09	6.16	7.48	9.56	8.56
K ₂ O	6.18	16.33	15.37	2.98	3.05
CaO	1.58	1.61	1.17	9.25	9.26
TiO ₂	0.75	—	—	0.76	0.79
MnO	—	3.98	3.91	0.26	0.24
Fe ₂ O ₃	1.95	4.67	5.46	4.03	3.92
CuO	5.13	0.10	0.11	6.43	5.96
SeO	—	—	—	0.15	0.12
Rb ₂ O	0.20	—	—	—	—
ZrO ₂	—	—	—	—	0.10
SeO ₂	0.65	0.23	—	—	—
BaO	—	1.10	1.42	—	—
PbO	1.26	—	0.33	—	—

参考文献

・肥塚隆保「化学組成から見た古代ガラス」『古代文化』第48巻 第8号 古代学協会 1996年

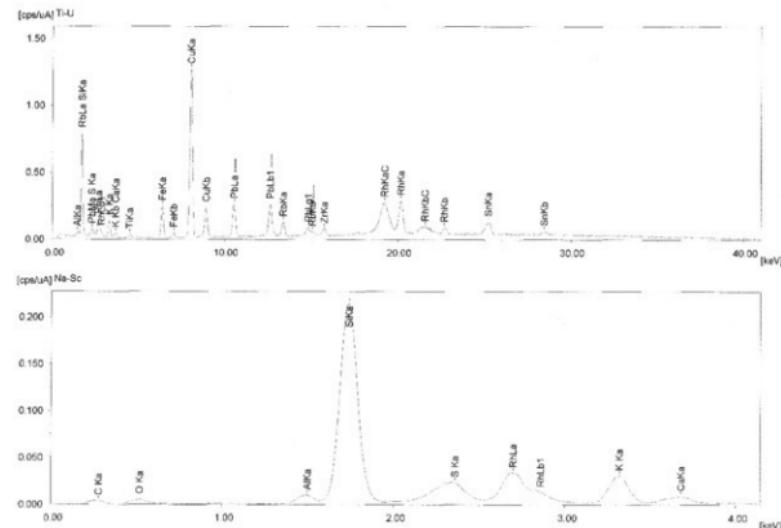


図1 No.1 ガラス玉 (G-1)

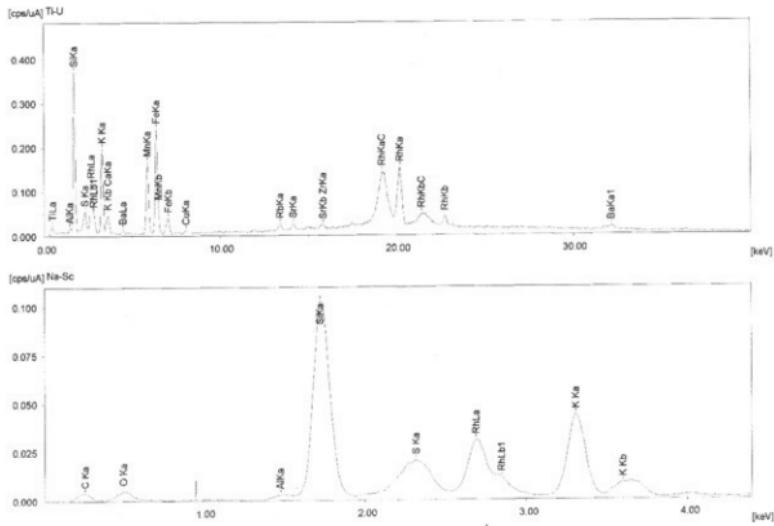


図2 No.2 ガラス小玉 (G 2)

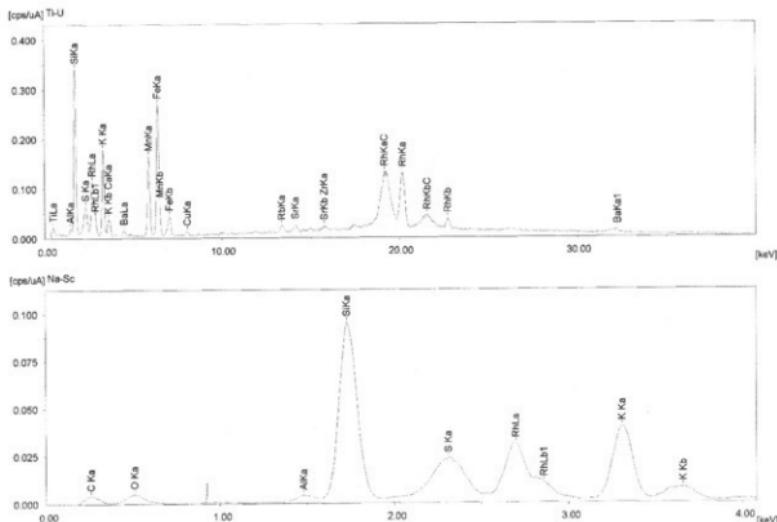


図3 No.3 ガラス小玉 (G 3)

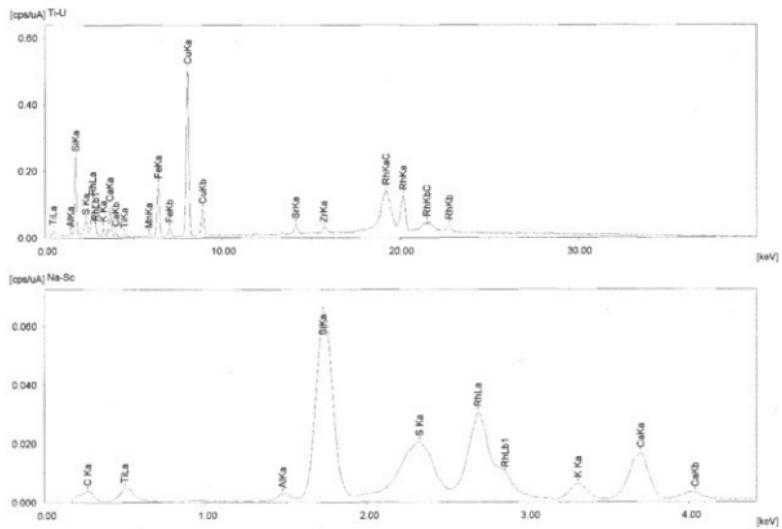


図4 No.4 ガラス小玉 (G 6)

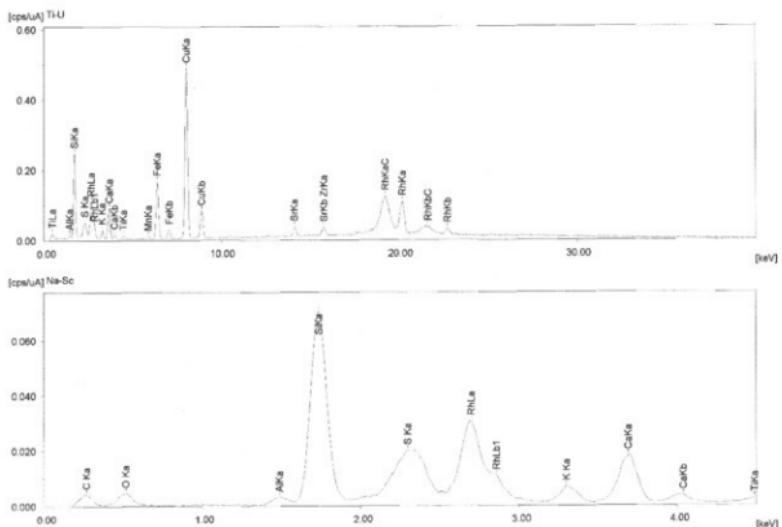


図5 No.5 ガラス小玉 (G 4)

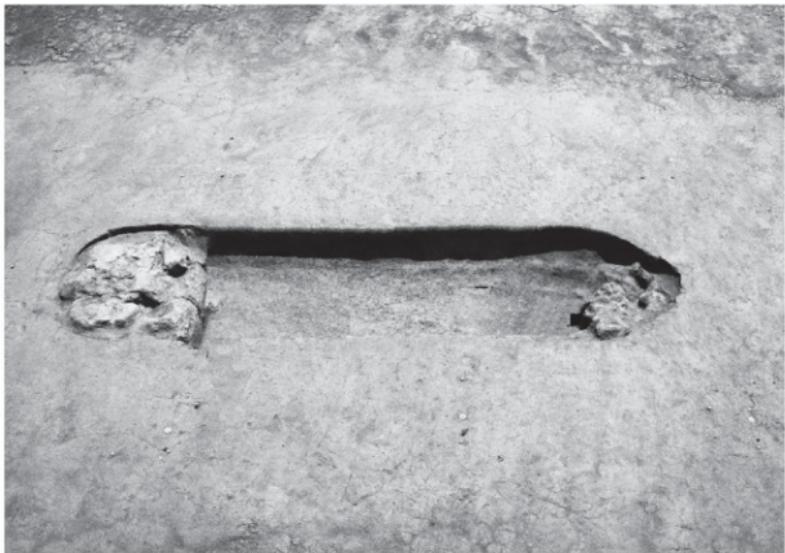
写 真 図 版



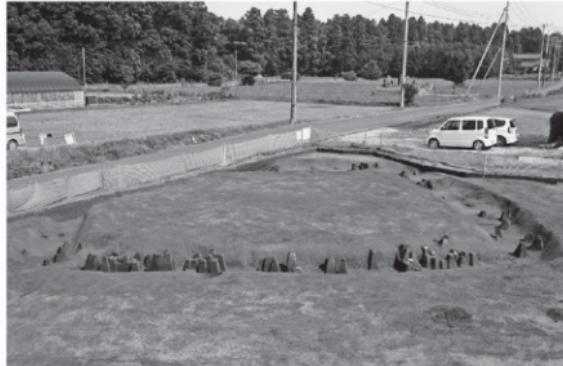
方形周溝墓・円墳出土土器



第2号方形周溝墓 完掘状況



第2号方形周溝墓 埋葬施設 完掘状況



第2号方形周溝墓
遺物出土状況①



第2号方形周溝墓
遺物出土状況②



第2号方形周溝墓
遺物出土状況③



第2号方形周溝墓
遺物出土狀況④



第2号方形周溝墓
遺物出土狀況⑤



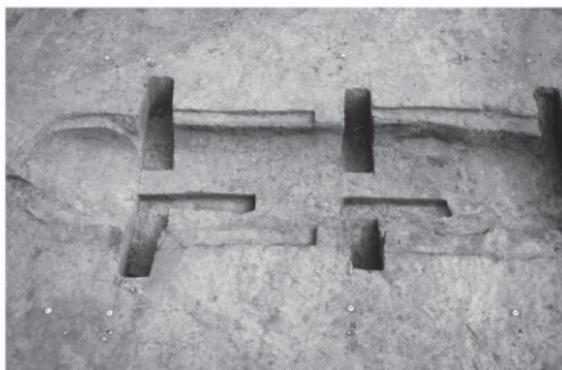
第2号方形周溝墓
遺物出土狀況⑥



第2号方形周溝墓
埋葬施設
玉類出土状況①

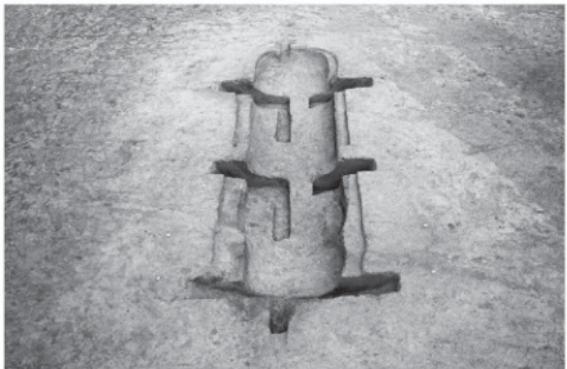


第2号方形周溝墓
埋葬施設
玉類出土状況②



第2号方形周溝墓
埋葬施設
掘方完掘状況①

第2号方形周溝墓
埋葬施設
掘方完掘状況②



第3号方形周溝墓
遺物出土状況



第3号方形周溝墓
完掘状況



PL6



第 13 号 墓
遺物出土状況①



第 13 号 墓
遺物出土状況②



第 13 号 墓
遺物出土状況③

第 13 号 墓
遺物出土状況④



第 13 号 墓
完 挖 状 況



第 1・2 号 溝 跡
完 挖 状 況





出土土器 (1)



出土土器 (2)

PL10



第3号方形周溝墓-12



第13号填-14



第13号填-20



第13号填-19



第13号填-15

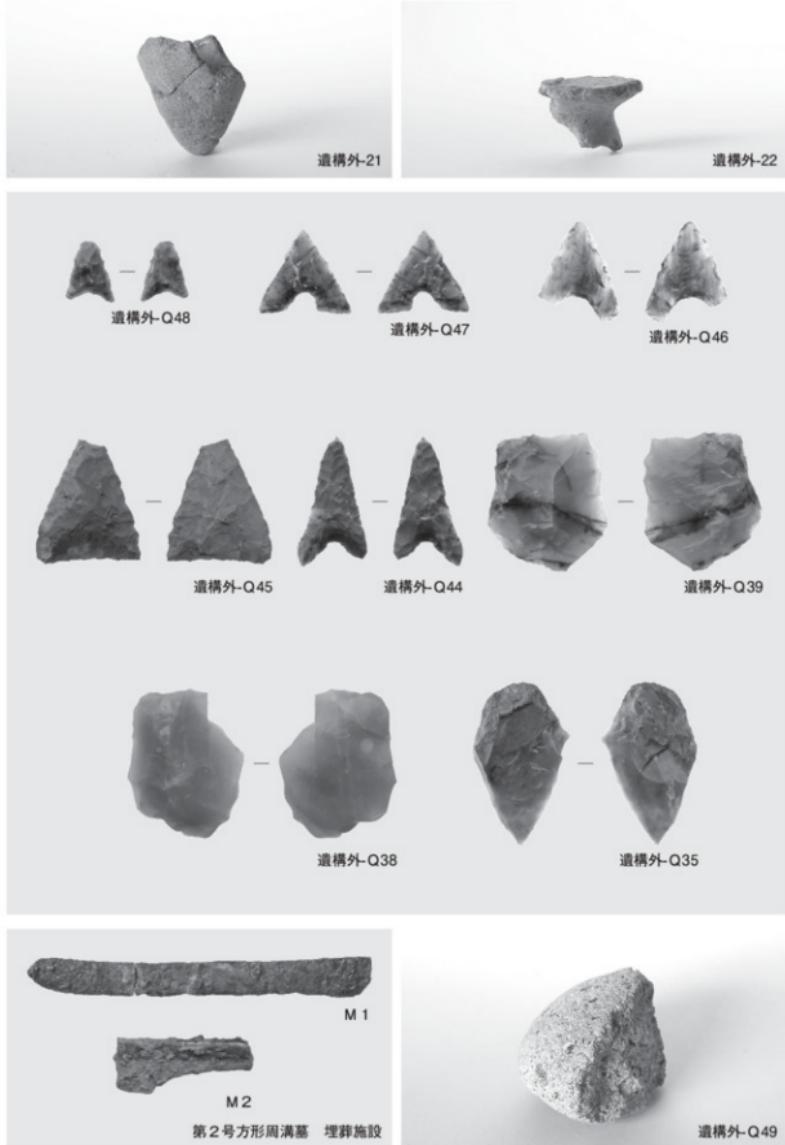


第13号填-17



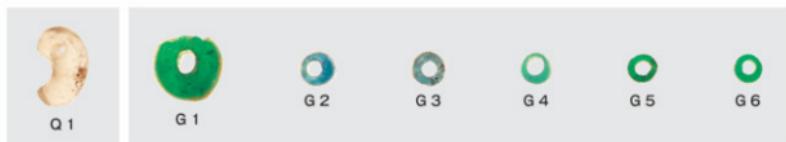
第13号填-16

出土土器 (3)



出土土器 (4), 石器・石製品, 鉄製品

PL12



第2号方形周溝墓 埋葬施設 出土石製品、ガラス製品

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Professional
編集 Adobe InDesign CS6
図版作成 Adobe Illustrator CS6
写真調整 Adobe Photoshop CS6
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
画面類 EPSON ES-G1100
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第391集

面 野 井 古 墳 群

都市計画道路新都市中央通り線バイパス
建設事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26（2014）年 3月10日 印刷

平成26（2014）年 3月12日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒311-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551